

卒業六十周年に想ふ

ゝ土佐中入学前後のことなどゝ

杉本 光朗

土佐高校二十八回生の卒業六十周年記念同窓会を、平成二十五年十月六日に、高知市で開催する予定で準備を進めているので、是非出席するようにとの便りが届いた。

昭和二十八年春の卒業であるから六十年という歳月が流れたわけで、当時十八歳の紅顔可憐な少年少女達も、今や数えて八十歳の傘寿を迎え白髪禿頭の翁・媪と化していることを思えば、聊か感慨なしとしない。

昭和二十二年四月から六・三・三教育が始まり、その学制改革による新制第一期生として入学し、中学・高校と六年間学んだわけで男女共学に若干の戸惑いを覚えながら喜怒哀楽の青春前期を過ごしたことになる。そう言えば国民学校の第一期生でもあった。往時を顧みて特に想うことの幾つかを記してみよう。

先ず第一は、両親への感謝である。昭和二十二年と言えば敗戦から未だ一年余り、占領軍からは民主化達成のためとして、各種の指令が相次いで出され既存の権威・権力は否定され混沌たる世相であった。

新憲法の制定・インフレの高進・新圓と旧圓の切替え・農地解放・公職追放等々で、旧来の価値観や制度は激変して社会の混乱、人心の動揺には激しいものであった。加えて食糧の配給も十分でなく、また日常生活に必要な生活物資も碌になく、多くの人々は窮乏の中に喘ぎながら懸命に生きていた時代であった。

明日への夢など持てないような時代であったが、戦に敗れたとは思えない奇妙な明るさも感じられる時代で、街には「りんごの歌」のメロディが流れていた。

一方、「星の流れに」の歌が敗戦の厳しい現実を示しており、否応なしに敗戦国の姿を認識させられたのも事実である。

占領下の改革の波に教育制度も大きく揺れ修身・歴史教育の禁止から六・三・三制、男女共学、PTAの誕生……と従来のものとその相貌は大きく変わった。

昭和二十二年四月一日から新しい教育制度が発足することになっており、中学への進学をどうするかが問題であった。

城東や海南等の旧制中学は試験による生徒募集はしないということで、新たに

地元で作られる無試験の新制中学に進学するか、学区制の制約のない私立の土佐中学を受験するかの選択を迫られたのである。

また、幸い試験に合格できたとしても通学をどうするかの問題もあった。当時、私は本山町在住であり、現在とは違い交通事情は極めて悪く、到底自宅からの通学などは望むべくもなかった。となると、高知市内或いはその近辺に住居を求めなければならぬが、戦災や戦後の外地からの引揚げもあり、住宅事情も逼迫しており簡単ではなさそうであるが、これをどうするか、更に食糧事情の悪い中で食事をどうするか等々解決しなければならぬ問題が多々あった。

その上、入学時に納付する金額も相当な額であり、親としては頭の痛いことであつたと思う。

いずれにしてもあのような状況の中で、本山から高知の学校を受験させ進学させるという決断は大変なことであつたことと思う。特に六人兄弟姉妹の長男であつたことを考えれば尚更である。

父と別れてから二十二年、母を送つてから十二年、思えば孝行らしいことを何一つしなかつた不肖の子であつたことが恥ずかしく、また、悔しい限りである。

残り時間も僅かとなり又あの世とやらで逢える日も遠くないと考えているが、再会の折には報恩の乏しきの詫びと同時に、土佐中学進学について改めて感謝の意を伝えたいと思っている。

第二のことは、良き師と友達に恵まれたことである。

大嶋校長先生をはじめ多くの先生方に御指導いただいたのであるが、別けても私として忘れ難い恩師としては、松浦先生、町田先生、古谷先生、西野先生、小松先生、久保田先生、吉田先生など多くの先生方から大切なことを教わったと思っている。

特に松浦先生にはお亡くなりになるまで、いろいろと相談事にもなっていたり、仕事の上のことについてもヒントをいただいたり、と多大のご指導に与った。

次は良き友達を得たことであるが、先ず入学して最初に驚いたことは、何と頭の良い生徒の集まりであるか、ということであった。流石に全県下から自信のある者が合格しておりみんなに追いついて行けるかどうか心配であったが、どうにか驥尾に付してもったようである。

田舎者で内気であり、また少々吃り気味でもあったので、中々親しい友人がで

きなくて市内から大量に進学して楽しそうに談笑している人々を羨ましく思ったものである。その内ほつぽつと話し合える友もでき、お蔭で充実した学校生活を送れるようになった。

初めは川村容三君であったと思う。同君は戦争末期には本山に疎開していて顔見知りであったので話し易かったのである。また同君からは生涯の趣味となった囲碁を教わったが、現在でも団地の老人仲間と楽しむことができ地域との交流にも役立っている。

榊昌英君とは座席が近かった関係で、また浜口恭一君とは母の里が長浜であったことから、新階明夫君とは同君が永国寺町の尾木誠一君のお宅に下宿していたことから親しくなった。これらの皆さんには色々とお世話にもなり楽しい時間を持つことができたが、若くして亡くなり本当に残念なことである。

段々と人の輪が拡がるに従い新しく親しい学友の数も増えたが、中でも小松栄君、西山五朗君、公文俊平君、岡村毅郎君、前田典彦君、野村裕之君、吉村元秀君などとは、高校卒業後も大学生時代や在職の時を通じ今に至るまで一貫して厚い交誼に与っている。

特に野村・吉村両君とは、退職後は三人による貧乏旅行を年に三回ほど計画し、

東北や中部地方の秘湯巡りをしたり四国遍路をしたりして大いに旅情を楽しんだものであるが、今は事情があつて中止になつてゐるのが少しばかり寂しい氣がしている。

この他ここに書ききれない程の多くの学友からも折にふれ多大の御厚情をいただいでいる。まことに有難いことである。將に、矢張り持つべきものは良き友達であると、しみじみ思う今日この頃である。

なお男女共学ということから、秘かに想いを寄せていた女性もいたのではないかと思われる向きもあるかと考へるが、そのような感情を持つには残念ながら幼な過ぎたようである。しかし今になつて考へると、「蟬しぐれ」(藤沢周平)の終章で「文四郎さんの御子が私の子で私の子供が文四郎さんの御子であるような道はなかつたのでしょうか」とお福さまが言い、助左衛門が「それが出来なかつたことを、それがし、生涯の悔いとしております」と答へる場面の描写があるが、同じようなことを夢想できる女性がいたなればどうであつたかと考へると、過ぎし時間を取り返したい氣がしないでもない。

ともあれ遠い日の儂い幻の如きものである。因みに、二十八回生からは素敵な四組のカップルが誕生している。

入学後の生活についてどうかと言うと、まず住居は永国寺町に確保できた。祖父が高知市の助役時代に購入していた家が、幸いにもあの空襲の中で焼け残っていたので、借家人と交渉して母屋七部屋のうち玄関脇の三畳間を返してもらい、そこで生活することにした。

食事は自炊することとし、本山の家族とは別に米穀通帳を作って配給されるもので調理することとしたが、どうしても簡単なものになり勝ちであったので、せめて卵でもと思い日曜市で鶏を買って来て飼ったり、家の前の二坪位の空き地を耕して野菜を育てたりして成るべく単調にならないように工夫した。

思えばこれが学校を終えるまで十年間に及ぶ自炊生活の第一歩であった。

食糧不足を補うため、御機嫌伺いと称して母の姉達の嫁ぎ先である春野や長浜、浦戸の伯母の家々を週末に訪ねることも多かった。行けば不憫がって御馳走してくれた上に、帰りには何がしかの食べ物と小遣いまでもらって大いに助かったものである。長浜・浦戸に行くには電車で棧橋通五丁目まで行き、棧橋から出たポンポン蒸気の巡航船で行ったと記憶している。

お世話になった伯母・伯父も、その跡を継いだ従兄・従姉達もとつくに鬼籍に

入って今ではその子達の世代の時代になっている。今度の同窓会への出席は又とない機会なので久しぶりに墓参りをして手を合わせて来ようと考えている。

一人暮らしを始めて困ったことは、入浴と洗濯である。本山では毎日風呂を沸かしていたが、高知の家には風呂桶もなく焚くべき薪もない。止むを得ず銭湯を利用することにしたが、これには色々問題があった。その一は盗難であり、その二は衛生であり、その三は営業日であった。

当時の世情を反映してか一寸した盗難騒ぎが頻発していた。風呂屋のあちこちに「盗難予防」の紙が貼ってあったが、一向にその効果はなく、まさに文字通りのこと、即ち「盗^ハ難^シ予防^シ」の結果に終わっていた。

また、当時の社会状況から公衆衛生の状況も相当にひどく、風呂に行っては有難くないお土産、ノミ・シラミをもらって来ることもあり、家に帰ってから着ていたものも全て熱湯で消毒する必要があった。

更に燃料の関係で毎日営業している銭湯はなく、曜日を決めて交代で営業していたので昨日は中の筋、今日は帯屋町、明日は中の橋と捜し歩いたことだった。

洗濯には本当に泣かされた。現在と違い電気洗濯機というような文明の利器は

なく、あるのは鹽と洗濯板であり洗濯石鹼のようなものもなかったと思う。

石鹼の代用は灰汁ではなかったかと思うが、今となっては定かでない。

暖かい気候の時はともかく冬場は大変だったことは鮮明に覚えている。今考えると我ながら良くやったと思う。

日常の生計はどうしていたかと言うと、前記の永国寺町には母屋の他に三軒長屋の貸家があったので、この家賃で生活費と学校の授業料を賄っていた。確か全部で月額百六十円か百八十円位であったかと思うが、幾ら一人暮らしとは言え相当に厳しかったことは間違いない。これが今に続くお金に縁のない貧乏暮らしの始まりである。

以上いろいろと拙いことを思い出すまゝに書き連ねたが、同窓の諸兄弟姉が入学当時のことを思い起こす縁よすがの一端ともなったとすれば幸いである。

いずれにしても、土佐中学に入学し高校卒業までの六年間に亘り、良き師に教を受けるとともに、優れた学友と共に学び得たことが、私の人生の出発点であり最大の財産であったことは疑いのないことである。

社会に出てからは、国土の復興・経済の発展とともに概ね順調な生活を営むことができ、今日在るはまことに有難いことで、往時を憶えば感慨も一入である。擱筆するにあたり、今まで受けた同窓の諸兄弟の御厚情に改めて感謝するとともに、これからの御健勝と御多幸を心から祈念する次第である。

（平成二十五年七月七日記）

二十八回生の誇り

佐竹喜三雄

「キャップ」と呼ばれたことが大変懐かしく思います。

中学から高校一、二年頃まで私の愛称だったのです。私たち新制中学の最初のクラスが土佐中野球部を創設し、富田先生監督の元で二年目から始まった高知県中学野球選手権で、第一回から不滅の五連覇を果たしています。

その当時の中学野球部キャプテンが私だったので、いつの間にかキャップが私のニックネームとなり、級友達は皆キャップ、キャップと呼んでくれました。

土佐高校野球部は私達中学野球部とほぼ同じメンバーで構成され、昭和二十五年に実質土佐高校野球部の歴史が始まっています。キャプテンは前土佐高校校長も勤めた池上君に変わりました。そして高知において土佐高野球部の名声を県下に轟かせるようになり、昭和二十七年春の選抜で甲子園出場を果たすという偉業を成し遂げたことは、ラッキーというより私たちの努力の賜物だと思っています。

二年生の夏、甲子園出場をかけた優勝決定戦を、宿敵の高知商と延長十九回を高知市営球場で戦ったことは忘れることが出来ません。0—0で迎えた十九回裏ツーアウト、サードにランナーを進められた場面で、バッターの打球はピッチャー左のゴロ、捕球できることを確信したショートの私がセカンドベース側にスタートを切ったとき、捕球のため俊敏に出したピッチャー池上君のグラブに当たった球はアンラッキーにも三遊間にコロコロと方向転換し、内野安打で万事休す、痛恨のさよなら負けで甲子園の夢が消えたことは返す返すも残念で、いまだに脳裏に甦ってきます。その時十九回を中田—池上の継投で、高知商打線をかわした両投手のすばらしい投球術と気力には敬服の念を禁じえません。

二十八年夏には我々と同じ釜の飯を食べた一学年後輩の山本投手と永野捕手を擁した二十九回生のメンバーが、甲子園準優勝の球史に残る偉業を成し遂げたことは我々の誇りでもあります。

今の時代と異なり、当時の溝渕監督の野球練習はスパルタ教育でした。灼熱のグラウンドでの長時間水なしでの過酷なノックなど当たり前で、汗に出る水分もなくなり、唾液も乾燥し声も出なくなるという厳しい訓練でした。

ミネラル補給など当時知識ありません。水飲めの合図と共に井戸水を腹一杯

にがぶ飲みすると、干からびていた体からおびただしい汗が一気に噴出し、その後しばらく経ってやっとまともに掛声も出せるといった究極の鍛錬の繰り返しでした。

冬場は、監督や数学教師の山本部長が自転車で併走しながら土佐高校舎から桂浜までの休みなしでのランニング、砂浜でのきついランニングを終えると、再び土佐高までの帰りのランニングなど、よく耐えられたものと思っっています。然しこのスパルタ教育こそ我々の強さの原動力だったと思います。

ある試合の攻撃で、サード森君がショートライナーを打ち、捕球されたのを確認したのでファーストまで走らず途中でベンチに引き返しました。

ベンチの前でいきなり溝淵監督からピンタを食らった事件は、試合を見ていた父兄もおりP T A問題にまで発展しましたが、本人の反省もありそのままおかまいなしとなりました。

アウトになったから走るのを止めたのは当然と映りますが、溝淵野球は如何なる場合でも全力疾走がその基本だったのです。ここに土佐高野球の全力疾走の原点がありました。私達の初の甲子園出場で、名門土佐高の名を全国に鳴らしめた「辞書を片手に甲子園」、「全力疾走の土佐高」の有名なフレーズの始まりです。

我々がこのことの元祖なのです。

スパルタ教育で得たことは、夏の暑さでもばてない強靱な肉体と、どんな苦境に立ってもあきらめず最後まで努力を怠らない不屈の精神を培ったことです。

七十七歳の年、七月末の猛暑の中でのゴルフで七十六のスコアを出し、人も羨むエイジシュートを達成できたのもそんなお陰ではないかと思っています。

また野球というスポーツから、チームメイトがお互いに助け合い、固い結束の元でのチームプレーがいかに大切かを学び、互助精神が芽生えたことです。

これらのことが今までどれだけ私の人生で役立ち、生かされてきたか、計り知れません。

土佐高校の野球部の創設に寄与し、初の甲子園出場を果たして土佐高野球部の輝かしいページを開くことが出来た二十八回生の一員であることに、深い誇りと喜びを感じています。

(平成二十五年七月)

ひたすら歩んだ一本の道

杉本 彰

1. はじめに

今、僕の歩んで来た道を振り返ってみると、余分なものが消えて一本道が見えてくる。

僕は昭和十年二月、静岡県で生まれた。七カ月の未熟児で、本来ならば、一学年下であるはずであり、苦勞を背負って生まれたようなものであった。

父は鳥取高農の農芸化学科を出て農学校で化学や農産物の加工を教える教師であった。六才の時、父は朝鮮の農学校に教頭として赴任した。同じ町の中学校に、後に土佐中の絵の先生になられる鎮西先生がおられたようである。当時、家に先生の絵が飾られていた。ずっと後に、先生から聞いた父の話から、僕の土佐中入学の事情を教えられることになる。

2. 朝鮮から引き揚げ、土佐中へ入学するまで

終戦で、父の故郷である高知に、リュックサック一つで引き揚げて来た。八人の子供を抱え、これからどうするのか、おそらく、両親は迷っただろうと思う。教師では到底この子達を養っていけないと思ったであろう。高知市行川の疎開用

のバラックを譲り受け仮住まいとし、子供達に手伝わせ、水飴と代用醬油の製造販売を始めた。物のない時代であり、はるばる高知から買いに来てくれた。自信を得た父は作業場のついた家を建て、本格的にこの仕事を始める決心をしたようである。

高知市神田の親類の畑を借りることになり、家を建てる材木を得るため、父の故郷である鏡村に父と二人の兄と僕の四人で大八車を引いて出かけた。村に着くと父が役場の隣の小さな郵便局を指さし、「親父がやっていた郵便局だ」と云った。昔、ここに住んでいたらしい。当時、すでに人手に渡っていた。

ここからさらに一時間ほど山道を登りや々と親類宅に着いた。木を切るお許しを得て山に入り悪戦苦闘するも一本も切れず、空の車を引いて帰ってきた。素人は山の木を切り出すことは難しいようだ。兄たちは後日、山に何回も通い、材木を手でき、製材をしてもらい準備はできた。

小学校六年生になって、神田に作業場を兼ねた仮住まいが出来て引っ越して来た。学校も引き揚げてから、三回目の転校であった。今度の学校は戦災で校舎はなく近所の神社での授業であった。

工場は日曜市で集めてきたような材料を使った父の手作りであった。製品は水飴と代用醬油である。

水飴の原料はサツマイモ、麦を発芽させた糖化酵素、燃料の薪、谷川の水等である。家族が力を合わせて水飴作りに取り組んだ。僕も麦芽をすり鉢で摺ったり、

水を運んだりして手伝った。

代用醬油は兄達が長浜からはるばる大八車でチリメンジャコのゆで汁をもらって来て、水飴を焦がし作ったカラメルといわれる色素で色づけし、塩分濃度を調節し、一升瓶に瓶詰めしたものである。口コミで飛ぶように売れた。今から思うと信じられないような話である。

工場も軌道に乗った頃、どのような理由か想像できないが、小学校の先生がわざわざ土佐中の試験を受けるように我が家に勧めにこられた。経済的な理由で断る父を制して母が受験を決めたそうである。そして合格した。「特殊な事情」による大島校長のご英断による合格だったそうである。

3・土佐中・高時代

母はよく「友の会」という会に出かけ、いろんな情報を聞きつけてきた。ある時、納豆を食べたい人が多いことを知り、早速、父を督励し、試験的に作り、試食してもらったら評判がよく、本格的に作るようになった。はじめはわずかしかなかったがだんだん売れるようになった。

そんな時、母から「今度、女子大の田中先生が中学の講師で生物を教えに行くようになったそうだから、しっかり勉強してね。出来が悪いと恥ずかしいから」と言われ、その後、「田中先生の奥さんから杉本が二人いたが良い成績だった」と知らされたと聞き、ほっとしたことがあった。中高六年間で母と勉強の話をし

たのはこの一回きりであった。呑気な親子であった。

水飴と代用醬油は世の中が落ち着いてくるとだんだん売れなくなり、兄や姉達はそれぞれ仕事を見つけて独立して、家を出て行った。

幸いなことに、納豆はだんだん売れるようになり、僕と二人の妹が学校へ行きながら、毎日手伝った。

納豆の製造方法は大豆を水で洗い、水に浸けてよくふやかし、水切りし、練炭を燃料にした手製の蒸し器で蒸す。この準備が終わるのが夜の十二時頃であった。翌朝八時頃蒸し上がった大豆に納豆菌を混ぜ、経木に計量して包み、室（むろ）にいれ、四十℃で約十五時間発酵さす。室から製品を取り出し、印刷したラベルをつけ輪ゴムで包装を整える。

僕も時々、学校へ行く前に大橋通、愛宕町や九反田の漬け物屋に配達した。

中学の終わり頃から、家業の手伝いばかりして勉強をしないのはいけないことだとの思いに苦しむようになった。周囲の秀才達との差は開くばかりで焦りを感じ始めた。将来どのような職業につくのか色々夢見るようになった。大学へも入りたいと夢はふくらむ一方であった。遅まきながら必死で勉強を始めた。しかし、高校三年になっても周囲の友達に太刀打ち出来るような実力はつかなかった。

大学は家業を手伝いながら通える高知大学文理学部理学科を受けて何とか合格した。

我が家の庭から小さな田んぼと谷川を隔てて直径三十センチもある大きな樫の

木があった。僕は、谷川から箆に小石をいっぱい拾ってきて、この木に投げつけた。ある時は、長島選手のような軽快な野手の格好をして、ある時は、オーバースローやアンダースローの投手のように投げた。余り投げるので、時々肩や腕が痛くなった。何日か休んで直ったらまた投げた。高校卒業の時には檜の木の下に投げた石で大きな塚が出来ていた。

お陰で後に鉄砲肩といわれるほど丈夫な肩になった。

高校三年の最後の体育の授業は珍しくソフトボールの授業であった。舞台は整った。

僕は三塁を守っていた。ゴロが来た。一塁に矢の様な球を投げアウトにした。見ていた松木先生が云った。「杉本、お前にそんな事ができるとは知らなかった。許してくれ。」と。土佐高の先生にかけられた、僕を勇気づける初めてのやさしい言葉であった。

六年間、この檜の木は友達のいない僕と一緒に遊び育ててくれた。会社員時代は野球をやり、現在は熱心にゴルフを楽しむのもこの檜の木のお陰だと思っている。

4・大学時代

大学では「化学」を専攻し、父と同じ道を歩むことにした。卒業研究は中林利平先生のご指導を受けた。先生は千葉の薬専から東北大学理学部を出て高知大の

助教授をされていた。

先生は高知に多く自生しているセンダンの甘皮に含まれる驅虫成分の抽出と合成の研究をされていた。学生達が合成した化合物を化学関係の文献の抄録雑誌であるアメリカ化学会のケミカルアブストラクトやドイツのペリヒテ等で未発表のものであることを調査させるなど、製薬会社が行うような研究をやっていた。この手法が卒業後、会社に入ってからの仕事に役立つなどとは思ってもよらなかった。僕にとつては中林先生との出会いはまさに運命的なものであった。

先生は化学教室の隣の官舎に住んでおられ、夕方、食事に帰られ、食後、八時頃まで研究されるのが日課であった。学生達もこれに付き合わされた。僕にとつて先生は生涯の師である。残念なことに、アメリカ留学から帰られてすぐ盲腸炎をこじらせ四十三才の若さで早世された。十三年後、先生の故郷である埼玉で墓前祭が行われ約二十名の卒業生が集まった。そのうち半分の人が学位を持っていった。先生の教育がすばらしかった証だと思った。あらためて、良い先生に巡り会えたことを感謝した。

もう一人、忘れられない先生との出会いがあった。高知出身の東大名誉教授の広末先生である。一年だけ高知大非常勤講師をされたため、僕は教員免許を取るため先生の生物概論の授業を受ける幸運に恵まれた。先生はあまり勉強しない学生に英語の文献の翻訳を宿題に出され、丁寧に赤ペンで添削されていた。僕はこ

んな親切な先生に初めて出会った気がした。僕もこの先生のような親切な教師になろうと決心した。定年後、教師をする機会に恵まれ、この思いを實踐することができた。

大学四年の時、中林先生より、東洋電化工業（株）の入社試験を勧められ受験した。

試験官のKさんに、四十年もの間、部下として仕えることになる運命的な出会いであった。

5・東洋電化工業（株）時代

昭和三十二年三月入社、二十二才の青二才であった。当社は戦前より入交家の九州の石炭と高知の石灰石からカルシウムカーバイド（灯火用、鉄溶断用など）や高知産のマンガン鉱石や珪石からケイ素鉄やマンガン鉄などの合金鉄（鉄鋼用）を製造していた会社で故入交太兵衛氏（入交英雄現会長の御父上）が社長をされていた土佐電化が前身であった。

当時、カーバイドが塩化ビニールの原料として需要が拡大しており、塩ビメーカーの大手化学会社と共同出資してできたのが東洋電化であった。水田を埋め立てた三万坪もあるう広い敷地に二基の大型の電気炉が建設されつつあった。

私は分析室に配属された。原料や製品の化学成分を分析するのが主な仕事であった。

数年間、分析の仕事に夢中で取り組んだ。人も増え仕事が少し楽になった頃、技術のトップのKさんから酢酸ビニールの研究をしてくれないかと云われた。とりあえず文献調査をすることにし、高知大の図書館で調べると、Kさんの母校である京大工学部の膨大な研究報告があり、早速、取り寄せ目次を付け報告した。Kさんから次の研究の指示があった。

(1) 蛇紋岩とカーバイドから金属マグネシウムの研究

蛇紋岩は高知市円行寺地区等に無尽蔵にあり、酸化マグネシウムとケイ酸が主成分である、高知の蛇紋岩は特に酸化マグネシウム分が高い特徴があった。また、カーバイドの破碎工程でできる粉末は売れなくて困っていた。

これらを原料として、一番簡単なピジョン法の実験装置を作ってもらい試作した。一回の試験で王冠状の純度九十九%金属マグネシウムの結晶が出来た。Kさんに見せると飛び上がらんばかりに喜んだ。すぐ助手を付けてくれた。元陸軍参謀の大尉のKさんは仕事は早かった。安価にできる原価を計算し、テストプラントを作ることを計画し、特許出願し、蛇紋岩の山を買う計画など電光石火のようであった。

(2) 製鋼用造滓剤の製造

こんな時、合金鉄製造担当のTさんから製鋼用造滓剤のサンプルを研究してく

れと持ち込まれた。一部上場の合金鉄メーカーのA社の製品であった。早速、化学分析し、内容を調べた。特許を調べると、特許公告されていた。私はこの発明の原理を研究した文献があるか調べてみることにした。ケミカルアブストラクトでアメリカの学会誌に発表されているのを見つけ、早速取りよせた。この時、Tさんより全く同じ製品ではまざいのでセメントクリンカー(セメントの中間製品)を一部使いたいと云われ、土佐高で同じクラスであった寺田秀章君に相談し分けてもらうことにした。製造法は購入した原料や自社の原料を破砕し混合するだけでよく、簡単であった。試作品を近所の製鋼工場に持ち込みテストした。結果は満足するものであった。早速、工場をつくり、売り出した。すぐ軌道に乗った。心配していた特許問題は幸いにも起こらなかった。

(3) 海水を原料としたマグネシアから金属マグネシウムの製造

テストプラントも完成し、蛇紋岩を原料とした金属マグネシウムの製造研究が開始された。結果は生産性が悪く惨憺たるものであった。私はすぐ海水と石灰から水酸化マグネシウムをつくりこれを原料とし合成ドロマイトをつくる案を提案した。石灰はカーバイド用に使えない粉末が大量にあったからである。還元剤のケイ素鉄の粉末も自社製で、これで製造原価はかなり安くなった。Kさんと栃木県にある日本で唯一のマグネシウム工場を見学した。ここでは天然のドロマイトとケイ素鉄の粉末を原料としていた。

試作のマグネシウムは合金鉄部門でマグネシウムケイ素鉄合金として球状化黒鉛鉄の原料として販売していた。しかしながら、市場が小さくマグネシウムの企業化は中止することになった。

その後、球状化黒鉛鉄の製造の外国特許の期限が切れると共に自動車用に採用され、市場が拡大し、この流れにやっと乗ることができたことは幸いであった。蛇紋岩も高炉用の造滓剤として新しい用途ができ、大量に売れるようになり、鉍産部ができるまでになった。これらは営業部が主導して進められたが、この成果はKさんの積極性のお陰であった。

(4) 飼料用リン酸カルシウムの企業化

私は配合飼料について調査していた。農協関係に市場調査に出かけたり、県外のメーカーの見学などもしていた。

そんな時、飼料用リン酸カルシウムの製造技術を売り込みに来た。当時、飼料用リン酸カルシウムはK大工学部の教授が研究されていた技術で、大手のO社の子会社で企業化され、その元教授が社長をしていた。日本でこの製品を生産しているのはこの一社だけであった。特許があり、有効期限の切れるのは迫っていた。特許はある添加物を添加して焼成するものであった。売り込みに来たのはO社の小会社の元社員で私と同年の技術士と事務屋の二人であった。売り込みの技術はO社の特許を利用しないものであった。特許の技術と売り込みの技術をテストプ

ラントで比較することになった。その結果、売り込み技術は生産性がきわめて悪いことがわかった。この試験結果を基に、この技術士は1000t/月のプラントを設計した。こんな簡単な手法に疑問を感じたので、寺田秀章君に焼成炉の設計の専門家の紹介をお願いした。この分野で学位を取られた方を紹介してもらい、懇切丁寧な説明を受けた。結果をKさんに報告した。

Kさんは何とか特許が切れるまで頑張っていた、そのうちに特許の期限もきれるであろう。現在、これ以外に可能な新しい仕事はないと話した。主力のカーバイドが石炭化学から石油化学への流れの中で、風前の灯火の状況で技術の責任者として出した結論であったであろう。

1000tプラントが動き出したが予想以上に生産性が悪かった。寺田秀章君に紹介された専門家の話を一緒に聞いた部下が生産担当の係長になっていた。私のKさんに対する説明が悪かったからこのような結果になったとせめられた。私は数ヶ月後、この方法での操業に限界を感じたので特許範囲以上に添加物を添加することを提案した。誰も反対するものはいなかった。結果は順調に生産できるようになった。しかしながら、O社からクレームが出た。そして業界紙にでかかると記事が出た。私は親会社のT化学の特許部長と課長に同行していただき、O社に出かけた。T化学の部長が説明すると問題は不思議にすぐ解決した。先方の弁理士もうなずくだけであった。私はまさに天才で仏さまのごときT部長に救われた思いであった。

(5) 公害問題

昭和四十年中頃の高知市は港六社と云われた工場からの煤煙などで大気汚染は市民の辛抱の限界を超えていた。公害防止設備の設置が義務づけられ、公害防止管理者を置く必要となり、資格を取るため受験を命じられた。私は幸にも合格した。神戸製鋼や東京製鐵は高知から撤退することになり、我が社が市民の攻撃の矢面に立っていた。市民集会に呼び出され罵倒された。翌日、私の顔が一時間テレビに映りっぱなしだったと部下の女性から報告があった。

市役所から公害防止協定締結の指導があり、市役所の担当は土佐高の同クラスの衣笠洋祐君で、日本セメントは寺田秀章君、東洋電化は私であった。各社の努力により協定がまとまり、調印式を行い、市長と共に昼食会に会社代表の他に私や寺田君も同席した。市長のにこやかな顔が今でも思い浮かぶ。内科の呼吸器の専門の医者であった市長は市民の健康を大変心配していたのであろう。

私は市民から煤煙の健康被害について質問されたらどのように答えたらよいか苦慮していた。外国ではどのようにしているか文献を調べ、「スイスの同業種の工場で公共機関がこの工場の煤煙は人畜無害である」と宣言したという記事を見た。私に最初に健康被害の質問をしてきたのは市のW部長であった。元図書館長の文化人であった部長はよくこんな文献を調べたとねぎらってくれ、大変喜んだ。市長にも報告したのであろう。市の担当の打ち上げ会に呼び出され、一緒

に祝杯をあげた。

後に、高知県の指導で公害防止管理協会をつくることになり、その事務局を担当させられ、製紙業界代表でクラスメイトの坂本健次郎君にも参加してもらい、毎年、県の正庁ホールで各社から公害防止の成果を発表してもらい、PRにつとめ、だんだんと公害も減っていった。社会的な大きな問題の解決に四人ものクラスメイトが協力出来たことはすばらしいことであった。

(6) 炭酸カルシウムの開発

炭カルは数年前から紙用のものを研究していたが思うよういかず研究を中止していた。上司のKさんに今後の炭カルの進め方の案を提出してあったが、退職された。

新しく変わった上司はTさんが炭カルをやるといっているので、計画通りテストプラントで試験し、工場建設した。まずまずの立ち上がりであった。鑄物用脱硫剤も企業化した。私はこれが最後の仕事と決めていた。

6・終わりに

長い技術者生活だったが、他の会社では経験出来ないような多くのことをさせてもらって、苦しかったが、がんばった満足感があった。

私は父と同じ化学の道を歩んだが、私は世界の情報を高知にいて入手する手段

を持てたことが父より少しだけ進歩したところだと思う。

定年も近くなつて、株主の大手自動車関連会社からカナダで蛇紋岩から安価な金属マグネシウムの製法が開発されたから調べに行くから同行するようにとの話があった。とりあえず、ケミカルアブストラクトでどのような製法があるのか最近の情報を含めて調べて見た。驚いたことに、私が最初に研究し、失敗した製法の特許の要約の記事が出てきたのには驚いた。全部で十件ほどあり、いずれも経済性のないものばかりであった。上司のTさんと出かけることになった。メーカー側から本社の担当、ニューヨークの支店長、アメリカ人の通訳が同行した。カナダで発表されていた技術は前もって調べた十件の中にある方法であった。話はすぐ終わってしまった。

自動車に使われている球状化黒鉛鉄を発明したカナダに来てこれだけで話が終わるのは情けなかった。英語も話せない私は情報化時代に適応することは無理だと悟った。それにしても、情報調査に全社を挙げて取り組むこの自動車会社の姿勢には驚いた。

最後に、高知では我々の学年を伝説の二十八回生といわれているようだ。文藝春秋の七月号（2013）に「これからやってくる人口激減時代は丁度七十年代の公害と同じだ」という記事を見つけた。みんなで公害を解決しようにこれからは公害を解決しなければならぬ。私は公害防止管理者の資格を取ったようにヘルパー二級をすでに取り備えている。

思いつきり楽しく生きて来た

山下 瑞穂

分不相応な仕事に恵まれ且つ異郷の地で七十七歳まで昼の仕事にも夜の仕事にも精一杯頑張り通し、今振り返ってみて、全く何の未練も無い、全く悔いが無い、何時死んでも良い……本当に未練は無いの？と聞かれても全く未練が有りませんと答えられる、とてつも無く楽しい人生を送って来た土佐漢の話です。

前 章

国の内外で数十のプラントを立ち上げて来ました。同時に工期短縮に命を懸け、逸早く操業開始出来る事に全情熱を注いで来ました。絶対に遅れない事を信条として来ました。その信用は破った事が有りません。

三百名弱の会社に幹部候補生として入社して以来十九年間で七千名まで急成長した会社に入社したわけですから、仕事は幾らでも有りました。この事が小生の一生を非常に幸運にして呉れました。然も本当に若い時から。

日本最大の建材工場群を設立したり、建材以外のいろんな工場を立ち上げたりしましたが、日本での話では幾ら面白いエピソードを開陳しても、大して興味を持って呉れそうも無いので、海外での経験をメインにお話しましょう。

海外生活も、普通の人では想像出来ないような長さで渡航回数です。週に二回も海外に出たり、一日に四回飛行機を乗り換えたり、2011年は年間十二回も海外出張しました。そこらじゅう、行って居ります。ナイトアンドデイで頑張ってきました。当然、交通事故も航空事故も多数経験して居ります。

飛行機事故はメキシコとブラジルでセスナ機が二度不時着、アフリカのケニヤでは大型のジェット機が鳥の群れを吸い込み、エンジンストップで千メートル以上も急降下、機内では七十人位の乗客の内四十人位は血だらけ、スチュアーデスは黒人なので真っ黒く余り出血の血の色は派手には見えません。でもひっくり返っていましたが、日本人は機内に小生たった一人、偶々ベルトを着用し寝て居ましたのでボヤッと寝ぼけていました。漸く翌日応援のボロ機が迎えに。

前述のセスナ機では燃料切れで海岸の砂浜に漸く降りた事や、軍隊の空港に燃

料を分けて貰いに降りて行った所、三時間も尋問に会ったとか、色々の事件も事故も、恐らく同窓生の何方も経験してないでしょう。

飛行場長にも成りましたよ、ニューギニアでの事、自分の会社の敷地内に飛行場を造成し、当国の国土交通大臣の元で飛行場長を委託され牧師立ち合いで宣誓式をさせられたり、勿論内緒でしょっちゅう自分で操縦桿を握ったり。

アマゾンでは大きな積乱雲の中に運悪く突っ込み、隣席のパイロットが顔中冷や汗でびっしょり且つ震えながらカトリックの神様を呪文のように唱えているのを横目で眺めると、アー、小生も此れで我が人生も御仕舞いかなあーとも思っていました、未だに命があるって事は、格言に曰く、悪運の強い奴は早く死なねえーて事でしょうな。

本題の前に軽く二つ程。

シンガポールの工場、此れは合弁事業でしたが、結果は大失敗です。相手はしたたかな華僑、役員会では日本側と彼等でも2対2、最後にチャーマンが全て華僑側に挙手、ここで完敗。

だけど、良い教訓が身に沁みだ。合弁の比率は絶対に49%では負ける。必ず

51%以上出資すべきだと、今後の海外進出のマニユアルが出来た。

フィリッピンの工場、この案件は90%小生一人で始めてそして一人で終えた、相手はマルコス大統領に次ぐNO2の国防大臣、引き合いがあり十八回も出張した、三年掛かって漸く完成。大臣には何でかえらく気に入って貰って大臣の豪邸の中の一軒を提供してくれ、勿論、食事、家事全般、車、設計事務所の提供等、あらゆる便宜を図ってくれ、1ドル三百六十円の時代に小遣いとして三千ドル毎月呉れた。出張旅費はあるし、家族は給料が丸々入るので、こんなに有難い仕事は無かった、が悪銭身に付かずで殆どがカジノ通いで無になって行った。

他にもインドネシアの工場、インドの工場等幾つか有りますが、スケールのかい、とてつもなく苦勞をしたブラジル、アマゾンのプロジェクトを中心にお話します。

第一章 無茶苦茶な飛行機での移動

先に飛行機は無茶苦茶乗りましたよと書きましたが、七十五歳で毎月渡航しそれも十四回も、とは、歳を考えれば、上等ですよ。若ければ何とも無いでしょう

が、これは値打ちが有ると思えますよ！こんな無茶な数ある経験の中での極め付けが次の話です。三十七歳の若造の話です。

1971年1月4日、零下二十八度Cのモスクワのホテルの一室に丁度二十二年頃でそろそろ就寝をと用意し始めた頃、日本より国際電話が入って来ました。先方が「急いで山下に来てくれ、直ぐにでも契約条件の詰めを行いたい、工場立地も推薦できる場所が見付かった：」と言っているようだが、目先の優先性を考えるとブラジルが手っ取り早いと思うので、電話した、君が一番良いと思う方を選び決定頼む、相手は出来る限り早くとばかり言っているが、どうだろうか：との事。向こうは専務とは言え、サラリーマン思考、此方は戌年（土佐犬）B型、おまけに獅子座、直情径行男：間髪を入れず、直ぐに発ちますと答え、電話にて部下の課長に夏服、旅行日程、ホテルの手配を指示した。

この間に思いもしないエピソードが有った。翌朝の引き継ぎ会議の後に、モスクワでお世話になった駐在商社員の奥様が来られ、此のたび帰国されるようですが、その際、是非とも下着を全部残して行って下さい：とえらく真剣にお願いされたのには、正直たまげた！！（何でや）既に使用済みにて新品は全く有りませ

んが、とやんわりと断ったが、奥様曰く、この共産国ロシアでは下着は全て配給制で非常に入手困難、買いたくても買えない、と説明を受けた、事情を知ると共産圏に滞在されている人達の苦勞が身につまされ、当方涙が出そうになった、勿論今夜の飛行機の中で着るものだけを残して、汚れた下着、パッチ、毛糸のセーター等、殆どを差し上げた、尤も流石に使用済みのパンツは恥ずかしかつたが：日本から持参した防寒帽子だけ此れは恥ずかしくて捨てて来た、何故ならロシアの人達は相当下層の方々でも、日本であんなに超高価なミンクの帽子を当たり前のように被っている、此方は安物の毛皮、何でも零下三十度C以下になると頭の中の脳味噌が凍って来るから傘は忘れても帽子だけは絶対必需品だとか。

さて、ブラジルのプロジェクトは、全て小生一人で会社を揺り動かして来た案件ゆえ、何事にも他に換え難く、翌朝モスクワプロジェクト関係者との引継ぎを決め、急ぎ極寒のモスクワを離れ夜行便に飛び乗り羽田に帰国、家内が大阪から、わざわざ羽田まで夏服を持って来てくれ、空港内のVIPルームで極寒服を今度はアマゾン用の真夏の服に着替え、極暑三十六度Cに備えた格好で、ろくすっぽ体温調節する時間も無しに、かの地に向け出発した。そしてニューヨークに着いたが、えらい失敗！ニューヨークの気温を全く頭の中に入れて居なかつたので、エ

ライ目にあつた。

其処は零下十五度Cの世界であつた。夏服だけではとても無理、空港に着くや否や身体中震え上がった。ホテルからは一步も外へ出られず、部屋の窓からエンパイヤステートビルを淋しく眺めていた、日本を出る時には、ネオンで彩られた市内を歩き回る予定だったのに、特にフィフスアヴェニューからブロードウェイまで少々遠路でもしっかり散策をと楽しみにしていただけにガツクリ、部屋のテレビは英語ばかりで仕事以外の家庭英語はさっぱり理解出来ず。行き先に不安が一杯の旅行第二夜を過ごした。此処での一泊以外は機内泊ばかり、何でニューヨーク廻りにしたか、恨んだ。

早朝便にてマイアミに向かう。其処から先はドミニカ、プエルトリコ、セントビンセント、トリニダードトバコ等東海岸を飛び寄港しながら、漸くブラジルの最北端アマゾン川河口から千八百km上流の自由都市マナウスに到着、再び国内航空に乗り継ぎしパラ州の首都ベレンに入った。一体何時間掛かったか、数え切れない、モスクワ―羽田が当時十五時間、羽田―ニューヨークがカナダ経由で十六時間、マイアミまで四時間ぐらいたったかな、其処からカリブの諸島を経由して

確か七時間ぐらいだったと思うが、当時は頭がクラクラしていて計算不可能。マイアミを出るともう暑くて暑くて空港寄港の度に休憩時間に背広を脱いだり、アンダーシャツを放り出したり、そんな事しか記憶が無い。次は西海岸廻りにすると誓った事だけは覚えている。勿論スチュアーデスは格別ボニータ！！

あつ、そうそう 機内で飲み水を要求したら、「センガス」と聞かれたが意味が分からず、聞き直したら、炭酸ガスが入っている水と普通の蒸留水の二種類が有る事が判明、同時にスペイン語かポルトガル語の必要性を痛感、ヨツシ、覚えてやろう！！

そんなこんなで幾ら若いとは言え、僅か二日半で零下二十八度Cからプラス三十六度Cまで六十四度の人間体温モルモット試験を体験させられたのには、全く閉口。二度とこんな目には会いたく無いなあーと、呟いていた。

こんな仕事旅行は七十七歳で仕事を終えるまで、海外だけでの仕事は数えて三十五年以上も続いた。少しエピソードでも聞いて貰おうかなあー、そんな考えで本文を書いた次第。

最初は上田君から「くろしお」に何か書いてくれや、との依頼があった、が少し迷った。

あの同人雑誌の内容は高級過ぎてとてもじゃないが、小生の日頃読んでいる本のレヴェルとは懸け離れており、「くろしお」の品位を落とすような文章しか書けない小生の筆致では、他の執筆者に嫌悪感を抱かせるだけでは……と考えた次第、半日ぐらいは考えあぐんだ、だけど逆に皆が気楽に読み捨てられる読み物も又一興かとも考えた。そこで請けた。

今までの投稿者の各位はそれぞれ日本の各分野へのトップを歩いて来た方々ばかりである、土佐高校在籍時代から彼等の将来像を容易に推測出来た人達が圧倒的に多い、あいつなら東大の教授に成って当たり前、あいつなら通産省の参事官になって当たり前だと、周りの想像通りにそして期待を実現されて来た一流人、活躍されたステージが違い過ぎる。

又皆さんの数多い渡航先や訪問先を本で知れば知る程、後進国専門の然も赤道直下ばかりで仕事をしていた小生とは違い過ぎ……皆様の行き先は、憧れの華やかな場所ばかりで嫉妬さえ覚える所、文章にしても興味を持って読んで呉れる他人

はいないのじゃないだろうかとも考えた、

唯、此れだけは言えそうである。特にM君などは国の代弁者（そう思っていない、というなら御免）として日本の国の為に頑張つて来た筈、それに引き替え小生の立場は失敗したら何時でも首を切られる、一サラリーマン、工場建設をし、生産軌道に乗せるまでの、ターンキーベースの仕事で、彼に比べると余りにもスケールの小さい仕事ではある、然し、この小さいプロジェクトが寄り集まって、日本を未曾有の高度成長路線に導いた、ほんの一助になっていた事も事実である。だから卑下はしなくても良さそうである。とも考えた。

其の苦勞の一部を、諸兄に知って貰えるのも暇つぶしには如何かと思つた次第。アフリカ時代、南米時代、東南アジア時代、思い出は尽きない、エピソードを心に二、三回は書いてみたい。土佐高校時代の存在からすれば、誰からも歯牙にもかけられていなかった筈の男の、余りにも「分」を超えた体験談である。

眞実のみを書いたつもりである。諸兄にヘエー！！と言われる様な話と受け取って戴ければ幸甚。

本論に入る。

最初に書いたブラジルのプロジェクトは大成功した、それには一サラリーマンの意地があつた。

我が社は、五、六年前にシンガポールに既に合弁工場を一工場持っていたが、今度、会社は合弁では無く単独でもう一つ最速で高利益の見込める工場の建設をと考えた、然し、全従業員の中で小生一人が大きな声で大反対を唱えていた、理由は簡単である、シンガポールの国の将来の存亡は、今後流通と付加価値の高い製品の製造、輸出、或いはそれらの中継でしか生きて行かれない、マレーシヤとの分離が此処二、三年中に必ず始まれば、現在無税で入荷されている原資材が十五%も税金を払わされる、となると利益が吹っ飛ぶ、一年以上も住んで居たので中国人の経営理念は良く判る、工場建設には原木が自給出来る国に進出すべきである！これが自説である、皆にそう説いて回っていた。

ところがある日、社長秘書より役員会に出席せよとの連絡があり、こっぴどく叱られた。ワシが進出を決めたのに貴様だけが猛反対しているらしいが、お前は馬鹿か、と散々であつた、拳句にトットの馬鹿か！1と言われた、トットの馬鹿とはどんな意味だろうかと怒られていてもクールに自問していた。

本件には一切関係持つな（全役員の冷ややかな目付き！）と言われ退席したが、自分の机に戻って良く考えてみると、大分焦ってきた、

サラリーマンになったからには、必ず役員にはなつてやるぞと、考えて生活設計を立てていた出世の計画がすっかり狂ってしまいそうだ、大ピンチになりそうだ。エライコツチャとお先真っ暗の気分、何とか挽回策をと考えて、雌伏三年、この間、国内の工場建設をズット手掛け、給料分は稼いではいたが、何せ派手な花火を打ち上げないと出世出来ないし、土佐男の値打ちも無い。

そこで、アフリカ、フィリッピン、マレーシア、インドネシア、インド、カナダ、中南米等、建築資材の多い地域をしっかりと調査、最終的に世界一資源の多い国をターゲットにしてみてもと、考えた。（追記。シンガポールの工場は結局数年後に閉鎖された、だから俺の話を聴けと言ったのに）

そして挙句の果てアマゾンに辿り着いた、ところが全重役、アマゾンとは何処や、位しか知識が無い。このままでは費用の出所が無い、其処で通産省の技術協力課に補助を頂戴し木材産業推進プロジェクトの名目で政府調査団として戴けた。此方は御座なりでは無い、話は順調に進んで来たので、その後四回も南米ブラジ

ルまで出掛けた、行けば往くほど余りにも興味を惹かれる場所だった。

然し家族全てを引き連れてまでは子供達の教育を考えると、単身赴任しか：

此れを頭の中の片隅に置いてプリジエクトを物凄い勢いで推進した、

そして、とうとう日本側の合弁商社も決まり、ブラジル側のパートナーも決まり
いよいよ出発進行。

1972年、五回目の渡伯で上智大と天理大のポルトガル語卒業の部下二人を
連れて南米最大の建材工場を建設する事になった。(投下資金六十五億、従業員三
千八百名)ところが此の二人が学校で学んだ言葉が現地ではさっぱり理解出来ず
到着後空港で既にノイローゼ、翌日は銀行に口座開設に行つたが、こんな事すら
満足に出来ず小生が英語で実施、ホテルに帰るや否や「お前達は詐欺か」と小生
に怒鳴りつけられる始末、従い何から何まで、本当に何から何まで自分で合弁会
社の設立から自分の宿舍まで自分で手配した、

日本でも、会社、工場一つ立ち上げるには結構何やかやと色々有る筈だが、海
外の然も秘境の地と言われるアマゾンに作る訳だから大変なんて物じゃ無い、
工場敷地は百二十万坪を私の名前で購入した、一口に百二十万坪と言うがジャン
グルを買うのだから、大変を通り越していますよ。

序でながら宿舎でさえ土地が千二百坪もありましたよ、最初の六か月位は日本人三人、女中三人、運転手、庭掃除下男と住んでいました。勿論言葉が一番も大変、前述の如くブラジルの言葉はポルトガル語、必死に昼夜勉強して三か月後から役員会は下手糞でも間違っても良いからと日本語を禁止にした。尤もどうしてもと言う時には英語に頼らざるを得なかった、ところが彼等の英語は全く下手！

少しジャングルの土地手配の話からしてみましよう、此れにも思い出が一杯ある、最初はセスナで機上より地勢調査、次はヘリコプター、そして最後に地上踏査。ところが此れも大変！ロープを身体に巻き付けて進んで行くが、敷地予定地の端っこのアマゾン川に届かない、二日目は細引きを持って行ったが、4 kmの長さのロープでも届かない、三日目にはとうとう、釣りのテグスを6 kmほど持つて出掛け漸く敷地の端から端まで到着した、余りにも今までの日本の常識を超越した話、その後こんな話を一般の日本人に説明しても全く理解してくれない、単なる大風呂敷と思われるだけだった、おまけにジャングルの中には毒蛇が沢山いるとか、豹が人間を襲うだとか、5 杯のボアー（アナコンダの一種）がいるとか、だが実際に怖いのは2・5 cmを超える大蟻だった、これに食われると一晚中痛痒くて大の大人が唸り廻ると聞かされ、毎日がオツカナ吃驚の連続だった。

ちなみに何故河に面した場所なのかと言うと、原子材の原木水中貯木場が工場立地の必須条件、ところが又これが面白い、川なのに干満の差が酷く、此れが又日本の常識を遥かに超えて十畧に近い、日本海岸は僅かで、北陸敦賀市に建設した工場で四十cm以下、太平洋沿岸は大きくて大阪や千葉では五畧ぐらいたったので、現地では設計変更が大変、それでも水面面積四万坪を現地人の人力で作ったが四か月を要した。面白い話だが満潮で百二十万坪が干潮の時は百六十万坪ほどに面積が増える、こんな話を本社に報告しても全く理解して貰えなかった、序でながら、小生が実際に見た干満の差が一番激しかった港は、韓国の仁川港で十五畧を超していた、唸った！

序でにもう一つ、アマゾン川の対岸までの距離が220km、大阪から名古屋までの距離が川幅、信じられますか？一番河口にマラジョ島と言う三角州があります、其の面積が何と九州と同じ面積、三角州なら大阪の中之島しか知らない私ですが、こんな所に何年も住んでいたら大概大風呂敷になりますよねー。

序でに大風呂敷の話をもう一つ、パートナーの候補者の一人が週末に彼の家の別荘でピキニ3、4名同伴して家の池でモーターボートにでも乗って来たらと、

言いおる、家の池で??ポートが走れるのか、何をエラソウニ!と
内心思つてフザケルナと口に出掛かったが、直ぐ後で話を聞くと何と彼の持つて
いる土地は四国と略同じ位の面積のケタ外れの大地主だそうである、それなら先
の見えないような池や、湖の一つや二つは持っているだろうなあー、ブラジルで
は今後大風呂敷なんて言葉は禁句!!

仕事の話に帰りましょう、日本でなら沖縄開発大臣とか北海道開発大臣に当た
るアマゾン片開発大臣に週に一回は必ず説明に行つたり、パラ州のギリオン知事
には週二、三回は面談に行つたり、州道路より工場までの長さ4km、幅20mの
道路を無償で建設さすべく交渉をしたり、勿論従業員三千八百名ほど雇う事が此
方の説得条件にしたが、先方にとつても、ベレン市最大の工場が出来る事の方が
雇用の面で大きな魅力である事は計算づく。

あれや、これや、広大なジャングルを日本の尺度で言えば、約八十万坪ほどを
伐採開墾して工場敷地を作り、建物は45m×300m、の主建材工場、若干小
さめの2次加工工場、計3棟を建設、毎日テンガロンハットを被り陣頭指揮した、
工場周りの土地は植林の義務があつた。九か月後には全部日本製の機械が到着、

これも陸揚げからジャングルまでの運搬、そして日本人技師四十名を招いての据え付け、毎日が楽しくて楽しくて仕様が無かった。苦を苦と思つた事が無かつた、少し気分が悪い時は横手のジャングルに入り。ピストルをぶつ放してストレス解消をしていた、結構上手ですよ。四千発は撃ちましたね。

お蔭で十五か月後、工場が予定通り生産開始される頃、NHKのテレビが入り「海外に働く日本人」と言うタイトルの中で小生を中心に30分番組で録画され日本で放映された、ソニーまで出向いてダビングして貰つて所蔵している。

此れも思い出の一つ。ブラジルの思い出を、若し面白可笑しく書き上げるなら百ページを超えそうですからこの辺で終わります。

愈々、最後のケリをつけるべく開所式を盛大に行い、日本から態々アマゾンまで訪問戴いたのは、本プロジェクトの日本側パートナーであり現地製品の全営業を行つてくれる日本最大のM商事の本社常務を始め、小生の会社の社長と役員三名、更に日本から南米アマゾンまで飛行機をチャーターして本社のお得意特約店様二百名をご招待（当時は特約店の方々を海外に、と言う営業政策が大流行だった）、勿論ブラジル側は大統領、アマゾン開発長官、パラ州知事等、多数が出席さ

れた、日本政府からはアマゾンの谷総領事が出席下さった。

これにて私も漸くお役御免。社長を交代して日本に凱旋した。工場の正門に五十人ほどが集まってくれ見送ってくれたが、殆どの人が「オトラバスアキー」と、日本語では「又此処に来て下さい」との事だが、今でも嬉しくて嬉しくて頭の片隅に残っている。

この合弁事業には相手捜しに会社の一番のお得意様の関西系商社を資材部、営業部から推薦があつたが、小生は社長を丸め込み、ワザワザ地球の真裏まで進出する建材メーカーとしては誰一人も考え付かなかつた、業界最大の大事業ゆえ、商社も天下の超一流を選びましょうと勧め一任して貰つた、勿論腹案は有つた。

此処で土佐高校が出て来る。土佐高校の先輩がM商事の南洋材原木部次長の要職におられた、我が社がメイン商社では無いので余り深い商売上のお付き合いは無かつたが、小生が腹を割って事情を説明したところ、真剣に話に乗って頂き、快く前向きに話に乗って下さって重役への面接が叶つた、此れが推進役となり事業が成功裡に至つたと言うエピソードもあつた。最終十九億円出してくれ、然も途中何にも言われず、それこそ一言の文句も無かつた、感謝、感謝である。

後で他の若手社員に聞くと、お前達は素人だから、プロには何も言うなどピシヤリと言ってくれていたそうである。流石、土佐男！

話が飛ぶが、此の土佐高校先輩の次長とは後日談がある。七、八年後に彼から今度はわしを助けてくれる順番だとの事、M商事の子会社の建材工場が8年連続して赤字なので此れを救ってくれとの電話で、翌日大阪から東京に出て来いとえらく急がれていたもので、行くと其処には既に木材部部长になっていた土佐高の先輩と子会社の社長が東京駅に迎えに来ておられ、そのまま船橋の工場に連れて行かれ、此の工場を助けてくれと懇願されると、もともと浪花節の文句の好きな小生、且つブラジルの時のお礼を返そうと思ひ、電話一本のお誘いで然も後先考えずに一日でお受けする事にした。頂戴したご親切は此れで返せた。此れは後日談。

序でながら、この工場は徹底的に良品質の製品を製造し付加価値を数割上げる作戦に切り替え、勿論高性能な機械の更新等、設備投資を認めさせて八か月後からは見事に黒字転換出来た。商事の方々からは非常にお褒めに預かった。

此れを機会に商事の関係先のフィリップ、インドネシアの仕事が急増してき

た。此の時に相手を説得するのに小生の取得していた特許がえらく役に立った。

サラリーマン生活（技術者）が二、三年続くと欲が出て来て技術力で業界のトップに成つてやろうと心掛けた、幸いにも一部上場会社とは言え、たかが住宅建材メーカーである。必死に考えれば何とか成る、然も安月給である。家計を少しでも楽にするには特許を取るのと、色んな免許資格を取るのが一番の早道（給料が上がる）：と此れ全精力を注いでバンバン取った。

お蔭で最終的に三十三件の特許を取得出来た。（勿論余りにも大きな、業界に影響のある案件は社長の名前にしたが）最近では調査不足だが、確か二十年前までは建材メーカーではトップだった。

そうなると、次の目標はこの職種の何とか世界一になれないかと考えた。丁度高度成長時代なので工場の新設、増設の話が一杯あった、これ等の設置設備機械に小生の特許が一部不可欠の物があり、必然的に工場の設計施工の話が舞い込んで来た。

プラントとなると、機械、電気、化学、建築、土木等、それぞれのプロの足元の知識が無ければプラント建設は引き受けられない、しようがないので、それ

こそ必死に勉強した。知らない事は全く恥を恥と思わず教えを乞うた。乞いまくった。ちなみに何で化学かと言われると、材木の接着には有機化合物が多く使われるからで、接着剤の工場も勉強して自分の設計で日本の自社工場や、ブラジル、フィリッピン、インドネシア、シンガポールの海外に4工場を建設した。お蔭で化学反応は少しは通になった。時代が良かった。其の程度で通った。

いつの間にやら建材の工場で、海外に8工場、日本で二十六工場を、何れもターンキーベースで設立した。自分を褒めてやっても良い仕事をして来たと自負している。勿論失敗も幾つか在ったが、こんな事もあった。工場の鉄骨を立ち上げしっかり固定をして。さあー上棟式だとばかり、職員二十〜三十人を引き連れて宴会、次の日に現場に行くと三百坪の鉄筋建物が全壊、ひっくり返っている：半分泣けた。でも振り返ってみると成功が遥かに多い。良く身体が続いたなーと今になって思っているが、楽しくて楽しくて。

だが一番最初に申し上げた通り、自分の「分」は越した事は無い、そんなに緻密な頭脳は持つてはいないので自分が自身の能力以上の仕事以外に手を染めた事は無い。山下は公文や前田や森下君達とは違うのだから、この信条は完璧に守っ

た。自分の住む業界のNO1に成れたらそれで満足だと常に身を律した。

お蔭で数の上では業界では世界一に成れた。大きな苦勞もあつたが、今は楽しかつた思い出ばかり。こと仕事に関しては何時、今、死んでも何の未練も無いと言ひ切れる。だがその反面、家庭は放りつ放し、だつたと思う。慙愧！

所で、この海外での仕事がその後の自分の生活、仕事に多大な楽しみを齎してくれた、それは幾つかの外国語が比較的自由に喋れるようになった事である。小生は其の国々言語を他の人より早く覚えられると言う特異な性質が有り、割と早く喋れた。此れがその後の仕事で物凄くプラスになつた。官費で外国語を習得出来るのだから、こんな有難い話は無い。

この質とは何かと考えると、どうも人前で恥ずかしがらない事だと思ふ。外国の大統領に会つても、大臣に会えた時でも「あがつた事が無い」、全く平氣の平左、そして知らない事には恥ずかしがらずに、何でも平氣で教えを請うた、知らぬが恥だと。全くの他人でも直ぐに友人になれる。調子が良いのかなあ…。

序でに住み難かつた国は、言葉以外に湿度が高い国、タイがそれ、大西君が永住していると聞くが尊敬します、他にアマゾン、ナイジェリヤ、日本人には無理。

酷かった。反対にこの世の極楽はカナダのバンクーバー、もう一つ、東アフリカのケニアのナイロビ、何故なのかは次回の「くろしお」にて。少ない年金生活でゴージャスに楽しむにはマレーシヤ。

ブラジルから日本に帰国すると、又々大事業が待っていた、日本一の建材工場を早急に作って呉れとのお達し、何せ佐藤栄作首相の第一秘書から購入した土地だから色々あった、本当に！眉に唾つけねばと言った話が一杯あるが、次回、サラリーマンの才覚では絶対出来そうにも無い話が沢山あります、又、小生の人生で一番女性に時期でもありません。こんな時期は男が一番活性化しているように魅力があるらしく、それが仕事にも影響して全て上手く廻っていきます。それは実感です。

第二章 仕事の終業（ネシヤに十四年）と夢

1990年 業種の全く異なる会社の役員をしていたが、I商事の部長がワザワザ自宅まで来て下さり、日本への輸入商品の品質のレヴェルアップの為に日本の住宅産業に寄与して欲しいと、言葉巧みにスカウトされると、ついその気になっ

て六年間六十八歳までの契約をした。

直ぐにネシヤに入るや現地の関係会社には、これから日本の最高技術を教えるからしっかりと習得してくれとの説明を横で聞いていたら、当方もスツカリ、テンションが揚がりつ放し、その気になって精一杯尽くした、とうとう十年以上も契約更改は一度もせず自然延長し、勿論商社側、現地会社ともに非常に大切に扱ってくれたからか、長期間過ごせた。

NHKだけは欠かさず見て南方馬鹿になる事は避けた。勿論ネシヤからマレーシヤ、シンガポールその他近隣諸国には相当出歩いたが、ネシヤが最も肌にあつた。女性もネシヤ人が何でか一番チャーミングだった。

漸くネシヤは卒業出来たと喜び、アメリカ人並みにハッピーリタイヤーと叫ぶ筈が又々、人生が変わった。

今度は現地会社から役員として工場の経営をして呉れと切望され、自分の将来の夢の世界遺産を数多く回る事と現地での仕事を天秤に賭けた。悩んだが未だ健康に心配が無いと思うので、もう少し後三年位働こうと考え直した。

結局、少し長くなって七十六歳まで、2111年にいよいよサヨナラパーティーをして貰えた。夕刻現地の自宅に百五十人程集まってくれ夕食を共にした。

お開きの前に二人の若き美女がホッペにチューをしてくれた、此れも思い出の一つ、未だに覚えている。

翌朝は夜勤の八百名を除き千八百人位の従業員を前にしての「工場長朝礼」此れは毎週月曜日の私の仕事（勿論ネシヤ語で）、此処でお別れの挨拶をして、皆の「スラマツト、ダタン、ラギ」日本語で言えば「又早く帰って来て下さい」との嬉しい言葉を背中中で聞きながら空港に向かった。

ちよつと現地の状況を説明しましょう、シンガポールより若干小さい島だったが、島内最大の会社のトップゆえ、一応は街の名士で、街の人も大切にしてくれた、勿論日本食は無いが、中華料理店が五。六軒あったので、そう困らなかつた、ストレス解消に、月に二度位は熱帯魚の観察にスキューバダイビングには行つていた。

そうそう、このダイビングの事で皆さんにジェラシーを与えましょう、この島よりマレーシヤに向けて300 km位の所の、絶海の孤島に世界でも有名なダイビングポイントがあり、七年ほど前に当時の小生の彼女、アメリカ人と彼女の友人、オランダ人、ベルギー人、ドイツ人、オーストラリア人全て若き女性、しかも全員別国籍、男性は日本人一人、六人で三部屋を借り切り二日間、潜つて来た事が

あつた。途中マンタの群れに会つたり、伊勢海老を採つたり、紺碧の海の下に群生する珊瑚礁に集う無数の色鮮やかな熱帯魚は、未だに脳裏より離れる事が有りません、それにしても、外人は徹底的に楽しみますねー！ひがむな、ひがむな、たまにはこんな事も。そう言えば途中マンタの群れに遭遇して直ぐ海中に飛び込み下から眺めていた。

漸く日本に帰り着いて。挨拶回りに行った先の商社で、又々一年間程マレーシヤ、ベトナム、インドネシヤの販売拡販と一緒に付いて行つてくれと、頼まれ、現地で一方ならぬお世話に成つた人の頼みなので、断り切れず短期間の約束で働き始めた。が矢張り一年は越した、実はこの人は部長と言う要職でもあるのに、ネシヤの僻地に住んでいる小生に、必ず日本食や酒のお土産を、他の人より遙かに数多く持参して呉れた人ゆえ、断れなかつた、土佐の人間は義理人情に余りにも弱い。漸く完全に引き揚げたのは。2112年3月、七十七歳であつた。

帰つてからのすべき事、したい事は、家内のリユーマチの罹病で、全てポシヤッタ。仕事を終え、いよいよ、さあー自由に世界遺産を廻れるぞと、大喜びする筈が、家内の病気が酷く進行して全てが……落胆も大きかつたが、これも日頃

の家族へのホツタラカシが彼女の病気の最大の一因らしいので、全く何を言う資格も無し。目下、真面目そのもので、家内、家内と尽くしてはいるが、家内は全然だと言っている。嗚呼！！

そんなこんなで確か三十五年位は外国暮らしかな、一ペイペイから社長も二回もしたので、もう良いかな、アッチの方も結構楽しめたし。

本当に最後の希望は、世界遺産を百か所廻って観たい、今まで五十六か所観たが、家内の罹病で全てポシヤッタ。一時停止かな。

同窓生の皆様を、遺産なら自然のグランドキャニオン、文化のエジプト、遺産ではないが、自然が人類に呉れた最大の贈り物、オーロラ：見学にお連れしたい。

あるいは世界三大夜景とか、滝とか、趣向を変えて世界三大美人国！！辺りの話でも如何でしょう。これには一家言あります。

「少年時代の思い出」

金谷 信

高校卒業から六十年とは驚きだ。私の高校での生活はさして長いものではなかったが、当時を振り返ってみたい。

高知へは小学校三年生の時転校した。江口小学校だった。すぐに高知大空襲にあい、姉弟三人、取敢えずオヒツにあり合わせのタクアンを放り込んで山に向かって一目散に逃げた。空一面、花火を散らばしたように焼夷弾が広がって落ちて来る。今にも自分の頭上に来るのではないかと恐怖を感じた。多くの皆さんが同様な経験をされていると思う。

空襲といえば大阪にいた時四条畷に集団疎開していて、大阪大空襲で大阪の街が真っ赤になって燃え上がるのを山の上から眺めていた。

高知市も危ないということで、中村の奥の山村に疎開した。終戦の詔勅もそこで聞いたが、よく分らなかつた。終戦後高知に帰って来た時はまた別の小高坂小

学校だった。

小学校の入学は京都で、京都師範の付属小学校だった。

折柄湯川秀樹博士が日本人初のノーベル賞受賞ということで日本中が大騒ぎになったが、たまたまご長男と同級生だった。戦時中で学童疎開もあって仕方がないことであるが、小学校は結局六回転校することになった。

土佐中には幸い戦災を免れていた入明町の家から市内の中心街を通り、鏡川を渡って、歩いて三十分位の通学をしていた。学校の帰り途、丁度城東中学の横を通るので立ち寄ると野球部が練習中で、エース前田投手のピッチング練習を、「ホウ！あれがドロップというものか」と感心しながら坐りこんで長い時間眺めていた。当時前田投手は、このたび野球殿堂入りをした小倉の福島、桐蔭の西村、京都一商の北村等と共に中等学校野球の投手四羽鳥と言われていた、野球少年のあこがれの的だった。

夏の甲子園の準決勝で小倉中と当り、確か一〇で敗れ小倉中が優勝している。当時甲子園では宿舎に米持参だったので、負けた城東中が残った米をほかのチームに残して帰ったことが美談として報道されたことを記憶している。

その後前田さんが慶応大の監督の時高知時代のご縁を頼りに会社の野球部への

選手の採用についてお願いに行き、第一号として土佐高校昭和三十六年卒の松本惟秀君をいただいている。前田さんとは食事やゴルフにとずい分親しくさせていだいた。

学校から帰るとすぐカバンを放り出して家の隣の旧制高知高校のグラウンドに行き遊び仲間と野球を楽しんだ。根っから野球が好きだったのだと思う。

もう一つの高知の思い出としては初めて囲碁を学んだこと。父に勧められてプロの先生について一、二年やった。ずい分後になって姉から、先生が父に弟子に貰いたいと頼んで父が断ったという話を聞いた。この時父が承諾していたら自分の人生はずい分変わったものになっていたと思う。

会社に入って勿体ないことに碁石を全く握らず、六十何年ぶりに酒井芳美さんから、土佐高の大先輩のお二人、西山卓先生（昭和二十年卒、元大阪工大教授）、栗山昇先生を囲むサークルがあるけど来ませんかと誘われておっかなびっくり参加した。

これがきっかけで囲碁が復活し、一昨年関西棋院で三段を貰った。子供の頃教えられたことはいつまでも体に沁み込んで残っているものだと感心させられた。西山先生はその後逝去されている。

中学三年で父の転勤の関係で山形県鶴岡市に転校した。両親はすでに鶴岡に移つていて丁度学期の切れ目の夏休みに一人で旅することになった。当時の汽車の旅はずい分不便で車中二時間の長時間の旅であった。まず乗った土讃線はトンネルが多く、その都度窓を開け閉めするのだが、蒸気機関車の煤煙ですぐ顔は真っ黒。高松に着き席を取るために栈橋を走って宇高連絡船へ。宇野から岡山、岡山で乗り換え、漸く朝早く大阪に着いた。乗り継ぎの便まで長時間あったので駅の外へ出てみると駅前はまだまだ戦争の爪跡を大きく残しており、バラックが林立し、闇市となっていた。かなりいかがわしい場所だった。大阪から鶴岡までがまたン長旅でやっとこさ到着した。

鶴岡に着いてまず驚いたのが言葉で、教室で友達が話をしているのがさっぱり聞き取れない。これが同じ日本かという感じだった。不思議なものでそれが一週間も経つと分かって来るしその内自分も同じように喋り出す。語学の勉強とはこういうものかとおつくづく感じさせられた。

鶴岡は徳川親藩の酒井藩の城下町で当時の人口、四万人位。藤沢周平が鶴岡市の出身。彼の小説に出て来る海坂藩はこの街を書いたもので、小説の中に登場う

る人物が今でも土塀の横から出て来る感じの街並である。

藤沢周平記念館や昔の藩校とか古い建物も残っていて観光で賑わっている。

今春、出身の鶴岡南高校の関西同窓会が、土佐高の関西同期会も以前あった日本酒「福寿」の酒心館で開かれ、六十年ぶりに私に合いたいと野球と一緒にやっていた二年後輩が二人東京からやって来た。その一人が金谷さんが野球について書いた冊子を持っていますよと言うので見てみると驚いたことに私が「くろしお」前号に書いた文章だった。

高知とはずい分疎遠になっていた。三年間のインドネシア勤務を了えて本社に勤務していた時、偶然エレベーター・ホールのところで石川堯也君に発見され、それ以来関西の同期会に出席させて貰っている。もう三十年位になる。三十数年ぶりに会ってよく私だと分かったものだと感じている。

我々の年齢になると健康上いろいろと障害も出て来るが、少しでも長く元気で同期の皆さまと交流して行きたいと願っている。

私の歴史記

藤田 玲子

「くろしお第六集」に投稿のため、改めて自分の来し方を振り返った時、大きく四つに分けられるように思います。

(一) 戦前・戦中のこと

(二) 建築に従事していた二十五年間

(三) 写真の世界に没頭した三十年間

(四) 平成二十四年春 大阪市本町・東京都六本木での写真展を終えてから―

今回は(二)より(四)をなるべく要約して書きたく思っています。

昭和三十四年秋(一九五九年)高知市内で製材所・材木商を営んでいた父の言葉により家族四人で大阪府豊中市刀根山に移住する。

建築は未知だったが 材木商の父と、若い時宮大工で修業した棟梁、豊中で知

り合った人々に支えられ建築の仕事覚えていった。丁度高度成長の時代が追い風となり、学びながら仕事が出来た良き時代だったと思う。良き人々にも恵まれていた。

二十五年間に二百五十軒ぐらい、総檜 小間井竹に土壁 日本瓦の本格的木造を建て、宅地造成も数カ所している。

今思うと あんな風に仕事の出来たのが不思議で仕方ない。

一九八六年（昭和六十一年）世の中がいわゆるバブルに突入する時期 危険を感じ、仕事の師だった父の死、二人の息子は別の仕事に就いた事など、諸事情も重なり建築を止めることにした。それ迄に建てていた賃貸住宅を収入として 決算五十二期目の小さい会社を経営して 生活の糧としている。専業主婦のときが短いせいもあり、学びながら覚えた仕事なので、今の時代に合わせての大改造もとても面白い。

建築中は毎日建築現場に行っていたので、私が居なくても日々の生活ができる態勢は整っていました。カメラを持って一人で近く遠くと毎日のように写しに行きました。最低一日一本のポジフィルム、多い時は二十本（一本三十六枚撮り）

は写しているから、今思うにそれも不思議の一言に尽きる感じ。今使用しているカメラでポジで写していくと思います。

写真は長男誕生の年一九五五年（昭和三十年）育児写真日記に始まり、家族・友人との記念写真、従事した建築現場の記録写真と宣伝用写真と、写し続けていたけれど、今写しているのは又別の世界の写真。

現実を写していても、自分の内面を映し込んでいるように思う。分野も広く、深く、その時自分の思うがままに写そうと思います。

読書会はPTAの有志が集まり、読書の他、色々な楽しい事をしながら良き友人に出会えた。私が一番若かったので、先輩に学ぶことが多く、また有志で登山も出来て、幸せな思い出がたくさん記憶の中に刻み込まれている。その昔、読んだ本の作家の足跡を旅したのが、昨年「記憶の風景」文学の旅より―の原点になっていると思う。自分では選べない本も広く読めたとし、読んで感想を述べ合うのも、とても勉強になって楽しかった。

一九九七年「魅せられて」時空のない旅―の写真展を大阪梅田の丸ビル、東京

有楽町で開催出来たのが最初。「さくら夢幻」は高知新聞画廊で、先輩の方々と同期生の支援により、思いがけなくも同期の女性の方々が大勢来てくださり、また、新聞・テレビと宣伝してくださる方もいて、ずっとご無沙汰し通しの私には申し訳なく、勿体ない思いが残っている。本当にいつまでも感謝しております。

「風のかたみ」うたのある風景―、「旅の風」列車で出会う人生の旅―、そして昨年春の「記憶の風景」文学の旅より―を最後と決めての開催には、完成したとの思いではなく、自分の全てを出せたと思っている。

写真会場の方は、同じ人に開催させたくないが、いつも切り口を変えて申し込むので、審査に合格させるより他なかったと、ふともらしたと人づてに聞き、体調と年齢的にも、私の流儀の写し方はもう続かないと、自覚していたので、これが最後と決めていて良かったと思う。

写真の世界で教えて下さった諸先生、所属したグループでの写友、そして写真の関係者の方々。世間は広く、さまざまな業種の人と出会うけれど、おつき合いでする人は、その時なしている“こと”の関連の人が多かったように思う。それを離れても友であり続ける人もいて、そのことも有難い。この頃は以前のように写

真について夜中までも熱く語る時はなくなつたけれど、世間一般のことをも気兼ねなく話せる友の居るのも嬉しい。

でも、自分では自覚してなくても、どこに行つても、私は最高年齢者に近くなつてきているようだ。私より年上の人が元気でしつかりと意欲に満ちた生活をしてくださっていると、私もまだ大丈夫、やれるか—と心丈夫で嬉しいのも、やはり年齢を意識しだしているせいなのだろう。

写真を写し始めて五十八年、すばつと止める気はないが、急激に熱中度が醒めていると思う。でもまあ、何事にも一所懸命打ち込んでいたのだな、いつも走り続けていたのだとの思いはある。あなたは走り出してから考えている、と言う友がいたが、的を射ている言葉と思う。建築現場で即決しないとイケない時が多かつたせいなのか？どうでしょう—

建築に従事していたお蔭で、日本でも外国でも、街並み、建物、またそこに住む人々により形成される雰囲気を感じ取り、楽しむ余裕も生まれてきている。登山した経験のお蔭で、テレビドラマ「坂の上の雲」のテーマソングの時、這い松の中の山の尾根道を見ると、谷川岳より西黒尾根を下りた時の事を思い出

すし、「水芭蕉」の歌を聴くと、五月残雪の中の池塘に咲く水芭蕉を、夏の黄色のキスゲの原を、また秋草紅葉の尾瀬ヶ原を思い出す。もう鳩待峠より大清水まで歩く体力はないけれど、檜枝岐より尾瀬沼までのコースなら、再び尾瀬の顔を見ることが出来るかな、霧の中の尾瀬を再び見たいと願っている。

写真をしてきたお蔭で、自然の移ろいの美しさを敏感に感じ取れているとも思う。湖の畔で只一人、暮れゆくさまを、星の流れを、夜明け前の空の気配と色と温度の移り変わりを肌で感じながら居られたのも、カメラが一緒だったからだと思う。写すと一枚の表面だが、その前後の長い時間の中で、一人で佇んでいられる強さも身につけられたのだと思う。カメラを持たなければできない事だった。

今振り返って思うに、少々変人みたいな事を何気なくしてきたような気がしている。父には長女だからと、長男のような育てられ方をしたし、病気がちの夫のこともあり、自分一人で事を決め、実行してきた事が正しかったかどうかは別として、私にはその道を歩くしかなかった、の思いはある。自分に与えられた道を一所懸命に、それでも楽しみながら歩いてきた。息子は、人間は自分の歩いた道を肯定する他ないのだと言うから、そうであるかもしれない。

一回目を書き終えたのは八月三十一日午前三時。漆黒の庭でマツムシの音がしきりに聞こえるほどに静かだった。今二回目の完成時、八月三十一日午後三時、台風之余波で吹く風の音が聞こえてくる。私は風の音も大好き、虫の声も大好き。この私の一瞬一瞬を、人間も動物も植物も同時に過ごしている。それぞれが違った感じで生きているのだ。この事は当然ながら、とても神秘的なことだと思う。貴重な時間の流れ、再び戻る事のないこの刻を大切に過ごしたい。文集に投稿出来るのも幸せと、何者かに感謝している。運命には逆らえないかもしれないけれど、心身共に年相応に健全で楽しく日々を過ごしましょうね。

ではまた・・・

最後の写真展の時に冒頭に提示した紹介文を書きます。

息子二人の家族四人 歴史街道を歩いたり

島崎藤村「夜明け前」を読んで馬籠・妻籠・中津川の石畳を歩きました。

読書会の友とは万葉を訪ね、谷川岳・白馬登山・穂高連峰にも登りました。

京都・奈良の花の寺もよく訪ねました。

従事した建築の職人さんと上高地では夕方大正池より河童橋まで、河童橋より明神池までは早朝歩きました。本当によく歩きまわりました。

でもそれは昔のこと―

今はカメラと一緒にの一人旅

時には親しいカメラの友とも旅するけれど、

なぜか一人旅も寂しくないのです。

たくさんさんの思い出がつきまとい、出会った忘れえぬ人々がおおり、

また訪れたい所も多く、もう一度会いたい人もたくさん居るのです。

これからも元気で旅を続けたい。写し続けたいと思っています。

ご多忙の中 会場に足をお運びいただき 感謝の気持ちでいっぱいです。

有難うございました。

昨年春の最後の写真展「記憶の風景」文学の旅より―の写真を
次のページに掲載します。

記憶の風景

～文学の旅より～

「記憶の風景」文学の旅より

文字が好き―映像が好き―

そんな私が カメラと一緒に

作家の足跡を旅しました。

文字の中なのか 空想の世界なのか

いつか出会ったように懐かしく、もの悲しい風景

そんな想いの詰まった風景を 集めてみました。



藤田 玲子

六十周年に想うく土佐のヨサコイく

岩井 嘉信

(序)

今日は青空 七月七日(七夕)の朝 梅雨も終わりかな。

「髪」お願いします…妻への一言…椅子と道具(ハサミ e t c)を前庭に構える。
四十年來の行事です。

今年梅がよく実り、二kg程とりました。梅干しに…、「ミニトマト」の赤い実、
ブラックベリーとか赤から黒い実にー朝のジュースの一部ー
ゴーヤも背をこえるほどに青(緑)の実が垂れ下がっています。

(章1)「YOSAKOIソーラン誕生秘話」《池上志郎(後記)談》

北海道三年生だった長谷川君が高知の踊り子グループを訪ねてきたのが最初の
出会いでした。彼が北海道で「ヨサコイ踊り」をやりたいの熱意が私の心を打ち、
協力をしようとグループ(セントラル)で北の国へ行く決心をしました。

平成四年一月のことでした。

(章2) 第一回 Y O S A K O I ソーラン幕明け

札幌大通り公園南側……土佐のグループのリーダーの腹の底からの気合い：
「ヨイヤツサー」アンブを最大限に掛け声と共に百人の踊り子が「ヨイヤツサー」
と……

テンポの早いディスコ系のリズムに合わし列が崩れすでに二列、四列と素晴らしいステップで鳴子を打ち振り踊り狂う。「ヨツチヨレ」よ、「きてみいや」……汗を流し、体をぶつつけ合う、……それでも洗練された踊りでした。

南一条四丁目に集まった十万人の群の心をはがっちり掴んだ一瞬でした。

(章3) どの国から来た〜土佐〜分からん 四国の高知じゃー

この若さと『躍動感』『リズム』涙ぐんで応援してくれた老人の手に赤い「鳴子」が握られていた、きつとこの祭りは続けてネ！

何時の日か「ヨサコイ」は北海道で育ち、全国区になる。私達は種をまいた。

花は若者達が咲かせてくれよう。でも、「実」は高知が取る。

土佐の皆で大きな花と実を取ろうと心に決めた。

(結) 今日 Y O S A K O I ソーラン開始より二十一年経つ

今、全国の「ヨサコイ人」は、故郷一番地高知に向かっている。

十年前の参加チーム：北海道で三百五十、高知百三十：

今年は北海道二百五十、高知は二百十五（現在増えている）

「土佐の高知のハリマヤ橋で……」ヨツチヨレヨ！！

(追伸) 1

孫娘（高一）もヨサコイを踊り始めて八年とか、最初は娘（四十五歳？）と有名グループの一員として踊り：（北海道、東京他を踊り狂う）

私もカメラ片手に汗を吹き拭き「オツカケ」をしたものでした。

（前述の池上とは義兄弟の仲です）

(追伸) 2

十月の六十周年土佐高二十八回生、ヨサコイ交流館（ハリマヤ町）に立ち寄って踊ってみませんか。

六十年一昔

福重 紀子

1Aから高3Mまで一番クラスが一緒だったのは鍵山雅子さんだった。品行方正、学力優秀で先生方のご自慢の一人だった。休み時間に席の中頃に集まって他愛ないおしゃべりをしている時なども、だまってにこにこしながら、輪の中に入っていた。

その後女子大でも二年間一緒だった。その頃公園の噴水の段で芝生に座った二人の写真をとってくれたのは石丸さんか毬さんだったと思う。何年かたって香川県で同窓会があるので是非とのことだった。丁度母の具合がよくなかったのでおことわりした。もう会えないかもしれないから……が終わりの言葉で、それから間もなく亡くなった。体調のよくないことが分かっていたのでしよう。

石丸さんは一緒の講義の時間は、いつも自分用の座布団に正座して、私の後ろの椅子だった。しばらくすると紙包みが手渡されて中身は甘納豆とおかきだった。中3になるとD組の私の席の前後は、田中繁子さん、黒瀬恭子さん、弘田春美

さんだった。すぐ仲間に入れてくれて、 $(A+B)$ 2乗、 $(X+Y)$ 2乗の分からない私にそれは熱心に教えてくれた。恩は忘れないが、成果は代数の先生が迷惑する位だった。

高1の時、その一年間だけの試みで、ホームとクラスが別だった。クラスは数学が二年程度上級とのことだった。私は最も離れた級を選んだ。北舎二階の隅の教室だったが満員だった。机間が狭く注意を要した。いつかそそっかしく席を立てて川村容三さんの鉛筆入れを落とすことがあった。私は謝ったが川村さんは涼しい顔をしていた。二度目も同じ表情だった。後から思うと頭の中は黒白の目で埋まっていたに違いない。

卒業して何年もたって、私はやっと山奥の小さな中学校に就職できた。夏休みのある日、井上の古書店の前で川村さんと出会った。川村さんはここにこして、僕が父の本を持ち出してここに置くと、父が黙って買い戻していると云った。父上はその頃県立の図書館長でいらした。井上から東への通りに証券会社があつて、そこに席をおいていると云った。すぐ近くに喫茶店がいくらかもあるのに、どちらも座ることを思いつかなかつた。高新的スポーツ欄のトップに、土佐の本因坊の見出しがあつたから、本因坊は偉いものだと思つた。

田中さんは華道の師匠、黒瀬さんは病院長の母、弘田さんは業界NO1の実業家になった。

江の口川に想う

岩井 嘉信

一、はじめに

江の口川は、高知の旧市街地を旭地区より高知城の北側を経て、東へ向かい国分川：紀貫之ゆかり：に合流し浦戸湾に至る。：幅二百坪、長さ十kmかな：南は鏡川：長く綺麗：。

幼少時（四歳～十歳）、家が地球三十三番地のすぐ南にあつた。親が林業：山から樹木を切り出し：二ヶ所の製材所で建築材を造っていました。：兄弟三人で手広くやっていたようです。：櫓で漕ぐ舟（三人乗り）を造ってもらい、僕の遊び道具でもあり、生活の一部でした。（帆も張れました）

ロープで束ねた材木の上を跳び、川にドブン（ふんどしで）、泳ぎました。

二、生活

母と二人で舟で布師田（一宮の近く）まで行き、田を借り、田植え、草取り、虫取り、秋には穂を刈り、束ねて干す：後は百姓の人に米（玄米）に：家の横

に二十坪程の畠を母が作る：エンドウ豆、トウモロコシ（キビ）、南キン（カボチャ）、イモ、大根、ナス：季節に合わせ作っていました。

また。ニワトリを飼い玉子もとれ、母自慢の玉子焼き：今では自分で作り：食べる物には当時にしてはあまり不自由しなかつたようです。

三、遊び

（イ）しじみ貝取り：江の口川の東、国分川との合流点で小さなバケツ一杯分を一時間足らずで取れました。

（ロ）エビ、ウナギ：柴木、竹をくくり川につける、ミミズをとり袋に入れておく、時間（二〜三時間）をみて大きなアミを下に入れ引き上げる：一回でエビ、ウナギがよく取れました。

（ハ）カニ（エガニ）：夜カンテラを灯し舟で石垣沿いに探す、目が光る、カナツキを刺して取る：オイシイ：

（ニ）ヤゼ（黒い手長エビ）取り：朝、潮の引きを見て石垣から出てくるのをエビ玉ですくう：学校へ行く前：尾からそろりと出てくるのを待つてすくう、スリルがありましたよ。

三、 戦災：終戦の「玉音放送」を大杉で聞きました：

七月の空襲で旧市街は大部分が焼け野原に、江の口川も真っ赤に燃えた：焼夷弾と人の血：僕たち家族も防空壕より飛び出し、花火に染まるような空の下を江の口川を北に一文橋を渡り避難しました。

四、 南海地震：津波と江の口川：

母と二階から降りられず押し入れにいました。父は近くの家が壊れ救助に行きました。その時は江の口川にかかる橋（旧北新町）のすぐ近くにいました。川の水が引き黒い川底が見える程でした。川が怒ったのを感じました。「ボラ」や「フナ」が白い腹を見せ流れていました。

閑話休題：近況を少し：

今、高知市の北山の下の川辺に住んでいます（裏が川）。

○朝九時、妻と近くのスポーツジムに出勤（車は別）、ストレッチ、筋トレ、ウォーキング、etc（一時間程→一・五時間）、風呂で汗を流しマッサージ器（細動式）でホグして終わり。

○スーパーに寄り、水（ピュアーウォーター…蒸留水…）を四リットル…ご飯を炊く時と朝のコーヒーetc…私の当番です。七人分（三・五〜四合）（娘二人と孫三人）米は仁井田米三十kgを七〜八ヶ。

○妻が家庭菜園らしきものをしているので「水当番」が私の仕事です。（鉢、プランター、庭木、etc）二十分程度、夏は朝。夕にやる。

七月なのにバラ（クリスマスローズ）ピンク色二輪、ミニシクラメン紅色が四輪咲く。「四葉」のクローバーの鉢―市販されている―「五葉」を孫が見付ける。

○蝉が朝早くから鳴きウルサイ！ 今年は「ミンミン」「ジージー」「ガーガー」多種に聞こえます。夏も盛りですが、少し疲れ気味。蝉しぐれと妻は云う。

（註）七人家族…僕ら二人、長女と子供二人、次女と孫娘。

五時頃次女の孫娘の迎えも仕事です（車で十分程）

草原日記く携帯メールで綴るく

川村 愿

はじめに

私は現在まだドルフィン八王子の4015号室に滞在しています。ここは殆ど個室ですが、たまに二人部屋があります。居住部分は2く5階で、各階には十四部屋あります。プラス医務室と給湯室です。トイレは各部屋にあります。バスは一階に(温泉ではないが)広い浴室が一つと普通の個人バスが二つあって、あと機械浴(専用の車椅子ごと入って周りからお湯が出て来るもの)が2く3個位あります。最初見学の時見ました。

施設にいてのんびり過ごしていて何も書く事がないな、どうしようと思つて、取り敢えず前に居た施設サンシルバー町田で宿題で作った俳句を投稿しましたが、

公文さんが高知の事を書かれたと伺つて、急に昔の事が蘇り、ミニ自分史にしようと思いました。パソコンはしばらく使えないけれど、最近は「携帯小説」を書く人もいるらしいから…。と携帯メールで始めたものです。子供達や孫たちに話

すお祖母ちゃんの心境です。

(六月十八日)

これからこの原稿に「草原日記」という題名をつけることにしました。草原の草は野中(実家)の父が俳句をつくる時「草巨」という署名を入れていたからです。原は私の「愿(よし)」の漢字からとりました。

父は明治三十六年四月二十日生まれ、母は明治四十一年四月十五日生まれます。父母の生年月日は多分これで大丈夫だと思いますが、もし間違えていたら、お父さん お母さん ごめんなさい。特に父の生まれた年は一。二年の誤差があるかもしれません。高知だとすぐ分かるのですが、今は東京の八王子なので、後で正確な事を調べます。

父の草巨の巨はどこから取ったのか今となっては正確なことは分かりません。野球の好きな父でしたが、特に野球に関係があるとも断言出来ません。今日は偶々「父の日」。知りたいけれど、出所は不明とします。

草巨の草も父の思いは推測するしかありません。私は私なりに草を解釈しています。父は漱石が好きでしたから(と誰かに聞いたことがあります)もしかしたら、草枕から取ったのでしょうか?そうでなくても「草」はなかなか良い字です

し、

「巨」も想像がふくらんで、良い字だと思います。

因みに私の「愿」の字は父から“素直な”という意味だと聞いたことがあります。辞書を見ると「つつしむ」と訓読出来ます。パソコンでもつつしむで私の「愿」の漢字がでます。携帯電話では残念ながら出ません。

父が三人の子供に付けた名前は、長女の姉が大正15年12月5日生まれで「她(みち)」昭和天皇の「她宮」から戴いたそうです。やはり携帯では出ません。昭和15年生まれの弟は彰(しょう)で、教育勅語発布の日(十月三十日)なので、最後の「：顕彰するにたらん」から戴いたものだそうです。

姉は一昨年七月三十一日に悪性リンパ腫で亡くなりました。

七歳年上なので、小さい頃 妹の私は足手まといで、遊んで貰いたくてもさっと逃げられたし、あんまり仲良しとは言えなかったかもしれないですが、いざ亡くなると3日くらいは終日涙が止まりませんでした。やっぱり父や母のそして高知の思い出につながるのです。姉の名前は昭和天皇の她宮裕仁親王にあやかっただけですが、その她は自由の由にシンニユウではなくて、建設の建の左に使うタテ

ガマエですか？ 最近テレビのクイズ番組で、漢字の書き順の問題などをよく見かけますが、漢字は難しく奥深いものですね。

私は高知市の小津にあった高知大学文理学部を卒業しましたが、旧制高知高校の後進で、今はもう残っていません。

現在は朝倉(今でも朝倉でしょうか?)に高知大学のすべての学部があつて、文理学部は人文学部となつたようです。

なぜ高知大学の話かと云うと、姉の主人が高知大学の助教授(現 準教授)で、姉一家は、三人の幼い娘たちと南瞑寮の官舎に暫く住んでいたからです。義兄は私の指導教官で、土佐高十六回生の水野茂氏でしたが、数年前に亡くなりました。姉が亡くなった年の年賀状は濃い紫色の夜空に北斗七星と北極星があるもので、「ご機嫌よく過ごしてますか?大学の北の空に星がきらめき 本当に土佐は夜空がきれいでしたね 星空と九日の満月を見ませう あれも これもすべて夢の様です」とペン字の添え書きがあります。

(六月十九日)

私はNHK「Eテレ」(このあたりでは2チャンネル)を朝六時から七時頃を中

心によく見ますが、その中に「ピタゴラスイッチ」、アルゴリズム行進、と云うのがあります。二人のリーダー（菊地さんと山田さん）がいて、消防隊員や高校バスケット部員、東北楽天などプロ野球選手、京都の舞妓さん、果てはロボット（A S I M Oでしたっけ？）などが「♪あっち向いて二人で前ナラエ こっち向いて二人でマエナラエ 手を横に まだ危ない 頭を下げれば ぶつかりません…。」と行進するシーンがあります。私はこれが大好きで、楽しく見ていますが、今朝は普段 硬い表情で演奏をしていられるNHK交響楽団員の方数名が行進に加わっていて、思わず笑いがこみ上げました。この番組は、立派な社会人も楽しそうに参加していられます。

私は以前の「くろしお」に書いた事を又書くかもしれないかもしれませんが、ご容赦を！
なるべくそうならないように気を付けますが…。

私の実家は高知市の旧北奉公人町（現在のの上町）三丁目です。市街電車（チンチン電車）道の一つ北に入ったところです。国際観光旅館 城西館は電車道に面した二丁目にあつて。徒歩二〜三分です。

実家の門にそつて、赤いレンガの塀があります。今は独身の弟が、一人で住

んでいます。塀の内の庭に戦争中かなり広い防空壕を掘っていましたが、今は壕は埋められました。当時あった大きな松の木は枯れて仕舞いましたが、今「わびすけ」という椿の木があつて母の好きな花でした。

城西館のすぐ前に坂本龍馬の生誕の地があつて、電話ボックスの上には深い緑色の胸像があります。城西館の向かつて右を少し曲がったところに龍馬ゆかりの饅頭屋の跡地があり、すぐ前に喫茶才谷屋があります。店の中は龍馬の肖像画やゆかりの品々でいっぱいです。その他、馬路村の冷えた柚子ジュースも販売しています。実家のお墓は二丁目を北に少し入った小高坂山にあります。山の端(はな)から上に少し登って行きます。矢野・野中両家の墓の左斜め前に父 野中良夫のお墓があります。市商の校友会に建てていただいたもので、父を偲ぶ言葉とともに父の俳句「寒の水掬へばかくも温かき」が刻まれています。母は平成十四年没ですが、この前はまだ仮のお墓でしたが、その後母思いの弟が考えてくれたものと思います。懐かしさのあまりこれまで実家の事ばかりになりました。

これから川村の事を織り交ぜていきます。川村のお墓は筆山にあります。天王墓地です。川村の両親 父 末雄と母 愛子が眠っています。夫 哲夫のお墓はお

陰様で町田市の南町田霊園に作る事が出来ました。分骨して両親の傍に納めようと一度帰高の際連れて帰りましたが、すぐには出来ず、まだ府中の仏壇に安置してあります。遺言で、太平洋に散骨してほしいといわれていますが、手続きが大変のようです。

(六月二十四日)

高知市北奉公人町の実家は戦災で焼け残った、私の生家です。高知市も大空襲に見まわれて、北奉公人町もほとんど焼けてしまったけれど、隣の家まで焼けてきた時、父が小高坂山(こだかさやま)から市内を見ていて、まだ今から行けば助かるかもしれないと降りて行って、当時近くに駐屯していた軍人さん十人余の応援を得て、防火用水の水をリレーでかけて焼け残りました。有り難い事です。

実家は玄関の四畳半、表座敷が十二畳、仏間が六畳、居間が十二畳、南に縁側があつて、かなり広い庭。北に縁側と中庭(ここに伯母が元気な時は七夕飾りをしていました)。横に廊下を通って、お手洗いがありません。私が子供の頃はまだ新築で、祖父が「家がよくれる」と、上がる事も許して貰えなかったけれど、その後終戦後は、焼け出された親戚が何人か入れ代わり立ち替わり住んで、随分お役

に立ちました。以前は高知城の城下町で、坂本龍馬も二丁目の入口の家で一弦琴を弾いたりしていたとの事です。姉から聞きました。

(六月二十六日)

私が物心ついたとき、私の家族は祖父 野中留吉、祖母 竹、父 野中良夫、母 千鶴子、姉 廸、それから矢野亀於、信雄、矢野雅恵伯母 公平の大家族でした。

弟は私が六歳の幼稚園の時生まれました。

亀於伯母さんは父の姉、雅恵伯母さんは父の兄 矢野安太郎さんの奥さん、公平さんは安太郎さんの長男。信雄さんは亀於伯母さんの長男です。安太郎伯父さんが早くなくなつたので、雅恵さんと公平さんを祖父がひきとりました。亀於伯母さんは夫が家庭を大事にしなかつた為、祖父が連れ戻したそうです。

家は表の座敷と裏の二階建てに台所、お風呂、トイレ(これは表座敷にも廊下で通じていました)。座敷と裏の家の間にはコンクリートの土間があつて、ここに機織り機があつて亀於伯母さんが良く機を織っていました。着古してはいても綺麗な着物の生地を繊維にそつて裂いて(ハサミで切らないで)幅二十五センチ位の丈夫な帯が出来るのですが、なかなか味がありました。和服の反物も何枚か織っていました。

(六月二十七日)

今日 浜田龍夫さんに 「フィネガンズ・ウェイク読解」という著書を送って頂きましたので、其れに関連した番外編です。

浜田さんには既にフィネガンズ・ウェイク解読のパート1〜4を送って頂きましたか、浜田さんご自身で前置きにも書かれているし、御本の後扉にもありますが、サム・スロートの「多くの他の正しいことより、フィネガンズ・ウェイクについて間違ったことを云う方がずっと愉快である」と云う言葉がとても含蓄があると思います。

私は特に詳しくはありませんが、高知大学の文学科(英文学専攻)の時 フィネガンズ・ウェイクの事を学び、柳瀬氏の言葉としても、ジェイムズ・ジョイスは非常に難解で、翻訳不可能とも云える。と聞いて居ましたので、浜田さんが、翻訳に挑戦されて、解読された事に大変驚きました。普通なら翻訳不可能と聞くところで、断念すると思いますが、今回、浜田さんが読解本を完成された事も凄い事だと思えます。

草原日記番外として、私は卒論に十八世紀の作家ヘンリー・フィールディングを選んで、「トム・ジョーンズ」と云う作品を中心に卒論(英文)を書きました。が、お正月休みに集中出来なくて、思うように書けませんでした。ヘンリー・フィールディングの他の著書ジョセフ・アンドルーズなどを大学の図書館で読んで(指導教官に云われて)時間不足になり、自分としても満足出来るものではありませんでした。まあ辛うじて卒論として完成は出来ましたが…。

(六月二十九日)

今、午前一時です。ここは個室なので、夜中にこうしてメールが出来ます。もと居たサンシルバー町田は普通四人部屋なので、消灯の九時以降はたとえ個室(プラス五千円)でもメールも出来なかったの、自宅以外としては便利です。ここも時々見回りに来られるけれど、差し支えありません。もともと昼間にメールすれば良いのですが、今日のような場合はここは有り難いです。

今テレビ(NHK 総合)はテニスのウィンブルドン選手権(男子)をやっています。ちなみにNHKテレビでは「どうしたら不明土地(粟国島―沖繩)をとり戻せるか」という問題をやっています。尖閣諸島問題でも、近隣の国とはなかなか仲良く出来ない

もので、難しいですね。本来は日本の領土らしいですが、安倍総理がおかしな発言をしていました。が、“論外”ではないでしょうか！

前置きが長くなりましたが、これからまた草原日記の続きを書こうと思います。ただ多分夜が明けてからになります。昨夜そのつもりでしたが、やはり無理でした。夕食(五時半から)が終わって帰ったのが、六時過ぎ、もう私は半分眠いので、やっぱり明日にしようと思いました。ベッドに横になると、七時には眠ってしまうので、テレビを漫然と見たり、本を読んだりして時間を過ごす事になっています。それでも八時前にはもう耐えられず、横になります。私は夕方七時を過ぎる頃には眠くなり、朝は四時には目が覚める事が多いです。

サンシルバーの時仲の良かった昭和四年府立第四高女卒の人にアンチエイジングだと勧められて、八時からのテレビをホールで見て、九時に帰って寝るようにならされたのに、今またつい八時に寝て朝は三時か四時起きに戻っています。自室にテレビをレンタルしてあるので、なるべく八時までは起きてるようになっていますが……。昨夜は八時に寝たら、なんと目が覚めたら、まだ九時でした。それからまた寝て目がさめたら日付が変わって、一時でした。まもなく午前三時で

す。

このままだと眠らないで朝を迎えるかも知れないので、一度電気を消して眠るよう努力します。

私の父の兄妹は既に書いた以外に二女の中平喜代恵(夫 文八)、尾崎千代子(夫 猛)の五人です。中平の伯母は子供がいなくて、夫婦で一時神戸住んだりしていましたが、晩年は須崎の宇佐に住んでいました。伯父さんは宇佐では投網(とあみ)の商いをしていました。私は養女に望まれたけれど、親元を離れたくなくて、伯母の期待に沿えませんでした。千代子叔母さんは世田谷区の尾山台にずっと住んでいました。先日等々力溪谷の事をテレビでやってたけれど、高二の夏休みに呼んでもらって暫く滞在した時よく行ったので懐かしかったです。従姉は中平敬子(としこ)吉田敦子(私より一歳上、尾崎誠一(二歳下)の三人でした。最近は叔母夫婦は故人で、従姉たちとも何年も会っていません。戦争中は従姉弟が夏休みなどに集まって音楽会を開いていたものですが。

(六月三十日)

今、午前一時六分です。NHK 総合ではテニスのウィンブルドン選手権男子3回戦 日本の錦織圭選手とSEPPI選手の対戦です。昨夜は七時半ぐらいから女性の職員さんで親切な方が七時半〜八時半位カラオケをしてくださったので、頑張って起きていて、帰って寝たら、目がさめると一時半位です。また間もなく休みますが、草原日記を少し打ちます。私の幼少時代父方の祖父母や伯母たちとは一緒に住んでいましたので記憶がよりはっきりしていますが、幼少のころ柴犬をずっと飼っていました。名前は代々「きち」といいました。一度子犬が数匹生まれたとき、その中で前足が白い犬を私はなぜか気に入って「オシロイ」と呼んで特に可愛がっていました。オシロイだけでなく、きちは家族によく懐いていて、父が学校(市商の先生をずっとしていました)から帰りに電車を降りるとすぐに察知して、鎖をガチャリと鳴らして立ち上がると家族が言っていました。実家の北奉公人町三丁目は電車道から一つ北の通りで、三丁目で電車を降りた所が実家です。

電車を降りた所からの音は、普通実家に居る人には聞こえませんが、犬の聴覚で可愛がっている父の足音を感じ取ることが出来たのだと思います。

(七月四日)

夕方食堂から帰ってきて、草原日記の続きをメールしようとして、ちよつと

思って横になったら眠ってしまっていました。

歯磨きをして、テレビ(NHK)テレをつけたら、百分名著でプラトンの「饗宴」を見ました。そのあと「会社の星」、入社太り脱出のトレーニングの話。若者だけでなく、我々にも多少参考になります。その後2355(ニーサンゴゴ)が始まりました。私は朝の0655(ゼロロクゴゴ)とともに、オープニングのアニメを見るのが好きです。

それから「お早うソング」と「お休みソング」などが好きです。間もなく午前一時になりますので、また一度寝て朝五時前後にメールします。

その前に大阪の友達に少し前に送って戴いた本のことを少し。「昭和初期流行歌歌詞集「昨日 今日 明日に歌う」辻厚生・西山卓編(飛鳥書房)です。尋ねてみましたが、もう飛鳥書房そのものもありません。草原日記の続きはここから始めます

昭和初期流行歌歌詞集の編者 辻厚生氏は高知市出身、大正十五年生、高知商業(市商)から大阪私立大学商学部教授(1984年5月31日初版発行当時)、

同編者西山卓氏は高知市出身、昭和三年生、土佐中学から大阪工業大学教授(1984年当時)。大正十五年と昭和三年は、もしかしたら学年は一年違い位で

す。昭和元年は大正十五年の十二月末の六日しかなくて、すぐ昭和二年でしたから。実は亡き姉みちが大正十五年十二月五日生まれだったから、このあたりの事は良く知っています。

辻厚生氏は姉と同級生になるようです。西山卓氏は土佐中の大先輩です。お二人にはお目にかかる機会がなくて、大変残念です。実は西山先輩には公文の市ヶ谷事務局で一度、短時間ながらお会いしています。「くろしお」第4集では先輩、後輩に原稿をお願いして 西山先輩にも書いて頂いたので、その関係で、その頃短時間ながら、お目にかかっていました。ただ。「昨日 今日 明日に歌う」が出版された時にお目にかかれなかったことが残念です。銀座の「薔薇の木」には時々見えたそうです。

辻厚生氏は私の父の教え子ではないかと思えます。父は音楽も好きで、市商で吹奏楽部を作ったりしたそうです。「くろしお」第3集にも書きましたが、市商の応援歌「牙城の守り」も父がつくったそうです。私が幼い頃にはいつも家庭音楽会をして、家族で一緒にたくさんのお歌を歌いました。

以上 眠れなかったので、メールしました。いかに安部さんでも早すぎるので、五時に送信します。でもうっかりして消してしまいそうなので、少し待ったら送信させて頂きます。

母は九人兄妹の末っ子、六女でした。通称フルジンチと呼んでいましたが、今の高知市曙町で、造り酒屋をしていた東村が実家です。母の次兄は弥勒正辰伯父さんで、土佐中高の時保証人をお願いしました。従兄の敬太郎さん（市商）の長男の展丈さんは土佐高の後輩です。母のすぐ上の五女、井沢の伯母さんの次男が二十八回生の修さんです。

母の実家の東村でも法事で従兄妹が集まりました。母の晩年にも何か法事などがあると、母のお使いで、弟の彰が行かされる、と言ってました。懐かしい思い出です。庭には梯子をかけて上らないといけない巨大な酒樽がごろごろしていました。ここのお蔵も怖かったけれど、野中のお蔵も言うことを聞かないで泣くと入れられるので、とても怖かったです。祖父がいつも助けに来てくれました。

夫 川村哲夫の父末雄は五人兄弟の五男で佐川に住んでいました。先祖は掛川から来たそうです。川村の母の実家は香美郡香我美町岸本で、川邑です。妹さんと二人姉妹でした。夫 川村哲夫の兄弟は三人で、岡崎在住の川村英夫さん（土佐高二十八回生）と高知市在住の川村武生さんです。夫の命日は六月三十日

です。猛暑のため、涼しくなったらお墓参りに行きます。

(七月十二日)

私の父野中良夫は、本来は旧制三高から京大を目指す筈でした。三高の試験の前々夜に事もあろうに近くの火事を見に行つて、風邪を引き、高熱を出して、受験にいかれず、次の年にまた三高と思つていたが、当時神戸高商が成長株になつて方針を変えた。試験はかなり難しかったが、余裕を持って合格、数学の試験は百点で、二人の中の一人だったと祖母から聞きました。

当時、就職は京阪神の会社に引つ張りだだったのですが、大家族の面倒をみないといけなかつたので、高知に帰りました。そして市商の先生になりました。二人の甥、矢野安太郎伯父さんの一子 公平さんは、大阪外語のロシア語、長姉の亀於伯母さんの一子 信雄さんは、ドイツ語に進学しました。信雄さんを実の息子のように可愛がり頼りにしていましたが、結婚してまだ子供がいなるとき、腸炎で亡くなりました。父の涙を見たのは二回だけで、そのうちの一回でした。

後の一回は終戦の玉音放送を庭で拝聴した時でした。公平さんは、はじめ早稲田に行きたくて不満だったが、終戦の後満州から引き上げる時、ロシア語が出来たお蔭で、周りの人達と一緒に命拾いをしたそうです。

引き上げのとき会ったかなり年上の女性と結婚して、子供も男女二人います。

私の姉は第一高女四年の時挺身隊に行く事になりましたが、個人的に四国銀行で、挺身隊の仕事をしました。当時予科練で出征する軍人さんの慰問団の仕事もしました。

姉は旧制度の第一高女から東京女子大の国文学科に進学する事を希望しましたが、父は薬学部なら賛成すると言ったそうです。姉は家にあった世界文学全集を尋常小学校五年頃には全部読んでいて、国語の先生にも「抑える場所はきちん」と抑えている」と誉められたと言っていました。

高知市立第四尋常小学校の国則先生に可愛がって頂いたそうです。後に小説家になった宮尾登美子さんとは親しく文学の話を電話などで話したものだとか姉から聞きました。宮尾さんはお家の事情で、高坂高女に進学されたそうです。

姉が女学生の頃家では父を囲んで、歌を歌う会を開きました。今ならカラオケかも知れませんが、姉の弾くオルガンにあわせて大正、昭和の歌などを沢山歌いました。この頃歌った童謡、唱歌、軍歌などのおかげで、大抵の歌は懐かしい記憶と共に蘇ってきます。時々従兄の信雄さんや公平さんがマンドリンを持って大阪から加わったり、従姉の敬子(としこ)さん、敦子さんが東京から加わったりしました。

原稿少し補足します。姉が小学六年で読んだ世界文学全集は姉の夫の水野茂さん(土佐中十六回生)が、芥川龍之介全集と交換してしまいました。無論父や家族の許可を得た上の事です。私は仕方なく? 「杜子春」「羅生門」「鼻」や書簡集など興味の持てそうな所を選んで、読みました。後で思えば大変良かったのですが。

高知大学(小津)の南瞑寮の官舎に家族で住んで、始めは長女の珠里(後では左里、恵子(さところ)を連れて北奉公人町三丁目の実家までお風呂に入りに来ましたが、窓の外は隣家のお台所で、本当に見たりはしませんが、「窓を開ければ、〇〇が見える、メリケン粉をこねている(メリケン波止場の灯が見える)」「へ別れのブルース(藤浦洸、服部良一、淡谷のり子)をもじって歌って、姉に嗜められていました。

高知大学では指導教官でしたが、授業中に、女房の妹で云々と言うので当惑しました。須崎の安和出身なので、高知市の空襲の後一時疎開させて貰いました。その時は小六だったが、六年生との複式学級を経験しました。

高知市の実家は隣の家まで焼けましたが、父が当時近くに駐屯していた軍人さん達に手伝って頂いて、防火用水の水をかけて、焼け残りました。

(七月十三日)

ミニ自分史にしようと思つて携帯で送信させて頂いて、随分長くなりました。思い出すままに、子ども達や孫たちに語る形のつもりですが…。今、午前三時半、昨夜食堂から帰つて、相変わらずテレビを見たり、眠ったりしながら間もなく夜明けです。そろそろ本当に纏めないといけないと思ひますので、話し足りない所はまた次回(草原日記自己版?)としてかな?に回します。以前「くろしお」に書いたことはなるべく重複しないようにしたつもりですが…。

孫は、長女高木真希子(在オーストラリア)には居なくて、次女片岡邦子(在富山県高岡市)の所に初美ちゃん、小学校四年生。三女水口宏子(在横浜市)に嵩智(たかさと)くん六歳と奨梧(シヨゴ)くん一歳八ヶ月。長男龍太郎の所に紗那(さな)ちゃん一歳十ヶ月がいます。

私は祖母に童謡などを沢山歌ってもらいました。「桃太郎」や「さるかに合戦」等の他、印象に残っているのは湊川の決戦に赴く楠正成(くすのきまさしげ)が櫻井で、長男正行(まさつら)に生き延びて再起を期せと諭す情景を描いた「青葉茂れる櫻井」です。《六番まである歌詞全体が物語になっており、本当は全部

載せたいところですが、一番を載せませす》

” 青葉茂れる櫻井の 里のわたりの夕まぐれ 木（こ）の下蔭に駒とめて
世の行く末をつくづくと 忍ぶ鎧の袖の上に 散るは涙かはた露か”。

その他私は物心つく頃からいつも「歌」がまわりにありました。みなさんもきつとそうだと思います。公文式教育法の創始者公文公先生も「生まれたらすぐに歌を聴かせましょう」と言われました。母とはある中秋の名月の夜、十数年くらい前でしようか 桂浜の岩に凭れて、「荒城の月」を唄いました。

宇佐の伯母は実家に来ると 幼かった私に添い寝をしながら「おうちを忘れた子ヒバリは青い畑の麦の中 母さん尋ねて鳴いたけど 風にお麦がなるばかり」と唄いました。やはり宇佐の伯父さんは「オレは河原の枯れススキ 同じオマエも彼枯れススキ どうせ二人は枯れススキ 花の咲かない枯れススキ」と唄ってみんな笑っていました。（本当は「どうせ二人はこの世では 花の咲かない枯れススキ」です。

母はよく編み物をして、何でも手編みで作って着せてもらいました。

父は校長現職のとき病気療養で休職するまでは、ずっと市商の先生でした。

休職して三年後に亡くなったのは満四十六歳でした。昨年七月に亡くなった姉は父のことを話すといつも泣いていました。八歳上で、私たち姉弟の中で一番父から色々教わったようです。宿直の時はお弁当を届けに行ったり。父はまだ学校が忙しくない時は家で趣味の俳句会をしたり、謡曲の会をしたり(おおかわ担当)していました。私はよくそばでひとりじっと座って見ていました。

母は九人兄妹の末っ子(六女)で家は造り酒屋でした。「加茂川」というお酒を作っていました。川村哲夫さんと結婚して長崎に行く時は八幡の従兄の所に数日泊めて貰いました。母の長姉よね伯母さんの三男、山本文三郎さん宅です。みんなから「文(ぶん)ちゃん、文ちゃん」と親しまれていました。伯母さんは御免在住でした。邦子が大分で生まれた時は母と二人で訪ねて来てくださいました。別府で温泉に寄って帰られたそうです。文三郎さんの次男の山本邦義さんは、高知新聞顧問から高知放送重役。独身で“孤高の”弟野中彰(しょう)(三十四回生)の様子を見に行っていただいたり、何かと有り難い存在です。御免の伯母さんの次男(文三郎さんの兄さん)は市商から御免まで歩いて通っていて、意志の強い秀才だったそうです。在学中破傷風で亡くなったそうです。

夫の命日は六月三十日でしたが、猛暑がすぎたら お墓参りに行きます。

忘れ得ぬ人々の為にも合掌します。

(2013年7月13日午前6時過ぎ)

ちよつと書き忘れたかも知れないので補足します。

父は明治三十六年四月二十六日高知県高岡郡高岡生まれ。野中留吉、竹の次男。母 東村千鶴子明治四十一年四月十五日高知市生まれ。高知県立高知高女(後の第一高女)卒。父母は高知市堀詰で催されたお伽話会で出会って、母の女学校卒業を待って結婚。東村の祖父母の六女。次兄の弥勒正辰伯父が私の保証人。母の父と長兄の名前は確認しないとあやふやな記憶。長兄は早大卒祖父、祖母は物に拘らない 優しい人だったから、記憶の曖昧な所はきつと許して貰えると思う。ただ、いつかきつと正確にしておかないと、と思います。

三女の宏子は現在夫と長男六歳と次男一歳八ヶ月に囲まれて、忙しく過ごしています。やはり「パパとママと姉妹三人と弟の六人家族で過ごした頃も懐かしく大切な時期だと言います。初めは前のメキシコオリンピック(1968年)の時は長女真希子と次女邦子が小5と幼稚園でしたが、次に長男が生まれた1972年は二歳半で、バンコクでタイ人のお守りさんソムチットさんに可愛がられて、

楽しかったようです。カイロ日本人学校の時のクラスメートとは今も交流があるようです。

長男龍太郎が六ヶ月の時帰国しましたが、私どもが住んでいた頃はエジプトもシリアも静かな平和な都市でした。レバノン情勢が不穏だったので、家族は平和を求めて、移り住んだのがエジプト、シリアでした。

長女真希子は外国暮らしが良いとシドニーに半永住で、会社も正社員で頑張っています。次女邦子は富山県高岡市で、姑さんと初美と夫婦で暮らしています。龍太郎のところの紗那はコミカルな面白い姫で、誰に似たのでしょうか？

『荒倉様』のおかげで

前田 典彦

はじめに

「くろしお」第5号の時から電子版を作り、第6号の原稿をブログに載せている。載せる際に走り読みさせて頂く。いろいろ面白い。八月に三週間あまりクルーズや車で北・西欧を廻ったのでそれでも書こうかと思ったが、美女四人の訪仏記もあるので、一転して川村愿さんのミニ自分史に倣うことにする。

これまで自分史は書いたことが無い。誇張抜きに事実を書いて、競争試験、資格試験のすべてで一度も落ちたことはないとか、七つの国民学校、中、高、大の学校生活、三度の出向を含む官僚生活、退官後の五つの職場で一度も苛めを受けたことはないとか、一五を超える異なる仕事ですべて面白かったとか、これらを正直に言えば他人には自慢のように聞こえ、私が尊重して来た徳目の一つの謙讓の美徳に反するように見えるだろうと思ったからである。それでは何故気が

変わって書く気になったかと聞かれれば、老化が進んで耄碌し、恥知らずになつたとも言ふしかない。

私が生まれるまで

父の荒亀は明治三十九年四月十八日、弘岡中の村の前田郁馬の六男として生まれた。小作人の郁馬は評判の働き手で若干の田地を持つに到つた。祖母の寅は郁馬の先妻が三児を遺して逝つた後、後妻に入り父を含む五児を産んだ。たいへんよく出来た人で、先妻の子が多額の借財をして入牢のおそれを生じた時、継子に冷たいと言われたくないと田地家財を売り払って与え、祖父一家は針木の山に開拓に入った。やがて梨作りを始め、新高梨開発の元祖の一人となつた。その時、父は高等小学一年で弘岡周辺六か村で名を知られていたが、教科書を庭で焚いて高小を去り、組合長に世話になることになつたと言ふ。これはよほど口惜しかったのか何度も聞いた。今の農協のような組合で雑用などしながら自活して少年後期を過ごしたのであろう。その後は、大正の頃米国の大型乗用車を輸入してバス事業をしていた会社に入った。時速百キロ出せる直線道路は仁淀川大橋しかなかったと言つていた記憶がある。

母の睦実は、明治四十年十一月一日、県立高女の教師をしていた藤原清太郎の次女として生まれている。彼は四十七歳で五児を遺して急逝したが、三十代で母校上ノ加江小学校の校長に内定し、同時に県立高女に招かれた時、将来帰郷して校長になるという約束で高知に出たと言う。早逝でこの約束は果たされなかったが、上ノ加江小学校には不相応に立派な謝恩碑が建っている。その妻つまり祖母の嶋は、四十歳そこそこから独りで五児を育て上げた。小さい地主で若干の米が入るとは言え、縫物をしながら一人息子は東京帝大を出させ、四人の娘の内二人は帝大卒に嫁がせた有能な人である。その意に添わなかった後二人の内、一人は入信してカトリックの尼となり後年はお供付、車付でないと外出できないほどエラクだったが、祖母は晩年、学歴も資産もない父と結婚した母を指して、結局『睦ちゃんが一番幸福』と言っていた。

このような変わった夫婦は、母の伯父が母を養女にし、父をその婿として後継ぎにしようとしたことでつくられた。母の話では、父は舅の意に反し養子の分際ですら平気で朝寝をし、起こしても起きないので困った由。その内、父は家を飛び出して養子縁組は破談となり、その伯父は別の養子を探して母と結婚させようと言っていたところ、母も伯父の家から出て、中断はあったが父との結婚を続けたと言う。実母の兄たる伯父の顔を潰して家を飛び出し、父との生活を選んだのだから、

当時としては相当な問題だったことと思うが、父の母親や伯父の母（＝母の母）などの理解と支援により乗りきったそうだ。

この話には後日談がある。この私にとつての大伯父はその後養子を迎えず、三十年を過ぎて私が大学に入る時、再び私の父母に声をかけ、父は高知の家を売って私の学資とし、夫婦揃って祖父の家に入った。ところが父はまた飛び出して、今度は大伯父も諦めて別に養子をとって後継ぎにし、めでたしめでたしとなった。この大伯父とは大学の夏休みに帰って将棋を指した記憶があるが、別に気難しい人とも見えなかった。そもそも、私の親父のような人を養子にしようと思ったのが間違いだったことは間違いない。

さて、私自身の幸運の第一は、この世に無事生まれ出たことである。私を身籠った時二人の産科医は母に産むのをやめよと言った。妹の一人は生まれてすぐ死に、もう一人は死産だったので正しいアドヴァイスだったのだろう。しかし母は諦めず、第三の老医が「天からの授かり物だから産んでみよ」と言うのを頼りに、それまで口にしたことがない小鮎をせっせと食べて私が五体満足に生まれた。

幸運の第二は私の名前である。私は生まれる前に荒倉神社の契約氏子になっていて、名前は荒倉様がつけて呉れた。といっても実際につけるのは神主だろうが、荒亀の息子だから亀太郎でも、双方の荒を冠して荒太郎でも文句は言えないとこ

ろである。しかるに典彦という名前をつけて呉れたのは奇跡的である。典は台の上に書物が立てて並べられた形から古の五帝の経典、ひいては法則を示し、彦は立派な男子を意味している。(大字典)

生まれてから土佐中入学まで

もの心つくまで、母にどのようなように育てられたかは直接知りようがないが、長女を母に育てて貰ったのを見て推察出来る。母は六十歳を過ぎて左腕に力瘤が出来るほど長女を抱いていて、何も判らない新生児の時からいろいろと話しかけていた。最も多く繰り返される言葉はオリコ(お利口)である。私の場合を推察するに、とくに趣味もなく、親戚や近隣との付き合いも少なく、私の眠っている間に済ませられないほどの家事もなかったであろう母は、私の前に常に存在し、私が不安になることはなかったに違いない。叱られた記憶はない。躰はあったようで、菓子は家に帰ってから食べるべきとされていたので、たまたま遊びに来ていた友達と一緒に駄菓子を買って貰い、その子がすぐに食べ始めたのが羨ましく、自分も食べたいのだが我慢しているうちに悲しくなって、「みっちゃん、道々食べるものじゃない」と泣いたという話を母から何度も聞かされた。

四歳の時、毎日小学生新聞を読んでいるということで新聞に載った。「弟に話したら『三歳四歳神童で、五つ六つが天才ではたち過ぎればただの人』と言った！」と母がえらく怒っていた記憶がある。何かからの引用であろうが至言である。私もその通りとなった。柳原幼稚園には何故か判らないが二学期から行き始めたが、秋には朝鮮の大田に移った。父は郡是製糸高知工場に勤めていて、本社から来た学卒の幹部候補生達をかわいがっていたようだ。大学入試の後その一人が工場長をしていた飯能に行き、たいへんなご馳走になったり、黒山三滝へ連れて行って貰ったりした記憶がある。学歴なしの地方採用の父が大田工場へ転勤になったのは、相当な抜擢だったに違いない。

翌年、大田国民学校入学、その暮に太平洋戦争が始まる。その次の年の秋に、父が一夜たまたま『おたふく綿花』の社長と飲んで北京行きが決まった。当時日本屈指の大企業だった郡是を一方的に辞めたのは、学歴からみて同社内での将来を見切って新天地に賭けたのか、痛飲して意気投合しただけなのかいまだに判らないが、「北京へ行くぞ」の一言に母も私も異を唱える筈もなかった。当然、郡是とは揉めて、退職金は要らないとした父に、北京行きの特急『暁』に乗ろうとしていた大田駅でかなりの額が届けられた。

大田では特段の幸運と言うべき記憶はなく、平平凡凡の二年間だったが、近郊にある千米級の岩山に登ったり、近くの清流で漬け瓶で婚姻色の美しい鮠を取ったり、父と十分に遊ぶことが出来たのはこの時期だけだった。幸運と言うべきであらう。

北京では三度転居し、三つの学校に行った。常に新入りだったが、苛められた記憶はない。転校早々、学芸会の『海彦山彦』の主役にされて、ソロを歌った。『春爛漫の花咲けば、霞をわけて鳥の啼き、秋清冷の気の澄めば、山絢爛の錦着る』と『歌えや踊れ賑わしく、陸のあでびと迎えにし、この喜びにつつまれて、海の歌をば高らかに』との両方は今も正しい音程で歌える。どちらの役だったかは忘れたが大成功で褒めてもらった。一生に二度とない経験が出来たのは、前の主役が転校した穴に新入りの転校生を当てただけのことだが、幸運と言うべきであらう。

王府井では、大きな中庭を囲んで四棟がありそれを屋根付きの回廊で結ぶ伝統的な中国建築の家に住み、隣棟の社長宅に自由に入入りして、背丈を超える本棚の本を読みつくした。獅子文六の『胡椒息子』などはその年で理解できたかどうか疑わしいが、吉川英治の『三国志』や『宮本武蔵』などは諳んじるほど読んだ。

この我家としては豪華な生活は、山東省張店の郊外に国策会社華北輕金屬が建設中の東洋一のアルミナ工場に父が徴用されて終る。四年生の秋、社宅が出来るまで一冬住んだ坊子は一く六年生でやっと一クラスになる五つ目の学校、その後五年生一学期を過ごしたのが建設中の社員の子供だけの六つ目の学校、いずれも記憶は薄い。

終戦の時父は警備軍に入れられて工場を離れていて母子二人だった。未稼働の大工場は八路軍の管理下に入り、社員家族は張店に移り引揚げの準備を始める。ある日、引揚げ列車が出るというので皆でそれに乗った。が、列車は動かない。匪賊が出たと言うのである。待つことしばし、今日は駄目だと言うことだった。んは捨てた宿舎に戻って来た。その晩、父が帰って来た。何たる幸運！予定通り列車が出ていたらどうなっていたか判らない。この後、半年近く宿舎で親子三人で住んだ。猛烈なインフレに見合った給料が払われ、生活には困らなかつた。どこからか手に入った本を読んだが、ポーの『黄金虫』はたいへん面白く、『アツシヤ』家の崩壊』は流石に怖かつた記憶が強い。

この間、国民政府軍と八路軍との戦いが続いていたよう引揚げ列車も出なくなっていたが、年明けて昭和二十一年の一月二十九日、零下二十度の中を社員とその家族百余名が挺団を組み、牛車を連ねて青島に向けて歩き出した。行程の大

部分は牛車を乗り継ぎ、一部は一輪車に荷物を託して人は歩き、一部は鉄道も使いながら三週間かかって全員無事で青島に着いた。夜は吹き曝しの厩舎の隅で高粱酒で腹から暖を取りながら寝たり、警備して呉れる筈の国府軍に時計や毛布を奪られたり、農民の襲撃に後尾の何台かが荷物をやられたりすることはあったが、挺団全体として幸運だったことは明らかである。私の牛車が襲撃から逃げようと走る中で横転したが、怪我をしなかったことは私個人としても大いに幸運だったと言ふべきであろう。青島で三週間余り引揚船を待ったが、この頃でも父の給与がたくさん出ている、綺麗なセロハン包の飴を幾缶も買って持ち帰った。高知に着くと今の上町一帯が焼け野原になっているのに、南奉公人町の母の実家のあたりの数軒が無傷で残っていたり、町角で鱈の配給をしていて引揚者と見るやたつぷり切り別けて呉れて祖母や叔父に喜ばれたなど、幸運が続いていた。

三月の末近くに帰国したのだが、ただちに上ノ加江に向かう。これも農地改革にあたり不在地主のままよりは誰か居た方がよいのではと考えた祖母達と、当面行くあてのない我家の利害が一致した幸運によるもので、永年家を貸していた遠縁の小作人が住んでいたところを半分にして我々を快く迎え入れてくれ、以後一年間仲良く住めたのも幸運であった。

学校の七つ目が上ノ加江国民学校で、一学年男女合わせて五十人くらいの小さな学校である。五年の二、三学期をやつてないので、一年下の五年生に入れて呉れと言つたが、校長に「謝恩碑の藤原先生のお孫さんだから」と言われ、否応なしに六年に入れられた。驚いたことに入つた途端に級長にされた。これは全く有難くもないが人生唯一の級長である。何かしたかどうか、『起立』くらいは云つていただろうが全く記憶がない。

私が本当に幸運だつたと思うのは、中国で自然と交わることが全くなかつた不運を一気に取り返し、泳ぎ、潜り、鰻取り、蝦取り、つ蟹取り、鮎取り、筍取り、山芋取り、野鳥取り（随分やつたが実際に取れたのは山鼠ばかりだつた）その他、農業一般を一年で経験したことである。この一年は、フルブライト留学で米国で過ごした一年と並んで、私の一生で最も楽しかつた年であつた。泳ぎは父の背中で覚え、ゼロから浦戸湾口を泳ぎ切れるまでになつた。蝦取りは土佐中で唯一他に擡んでいた特技で、鏡川はもとより、仁淀川や上ノ加江まで連れて行つた友は多い。

もう一つの幸運は、クラス担任が栗山雲涛と号する書家だつたことである。中学入試に備えて週に何夜か伺うのだが、教わるのはもっぱら書道、時には夜釣りだつた。何故に特筆すべき幸運かは後述する。

土佐中・土佐高時代

学制改革で城東中学の入試が消えた後、土佐中が生徒を募集しているという話が聞こえてきた。汽車も着いてなく、卒業写真でみると私を除く全員が藁草履を履いているような僻地まで、この情報が応募に間に合うタイミングで届いたこと自体が幸運である。そして、生涯最初の試験に落ちなかったのはたいへんな幸運である。

卒業時のサイン帳に、ある女生徒が、「質問をされる時『イヤ先生』と必ず云った・・・」と書いたのを見て驚いた。『必ず』はオーバーだろうが、廻し書をするサイン帳に嘘を書く人は居ないだろう。とすると随分不遜な態度の生徒だったと思う。また別の女生徒は、私が授業中に度々『ハハン』という奇声を発していたと書き、ある男生徒は、「醸すという字が出た時君は『アア山田』と云って笑ったね」と具体的に書いてある。私自身は記憶にないということは、自分にとって普通のことが、他人から見るとかなり奇矯な行動であったのであろう。それが、咎められも苛められもせず罷り通ったということは、よい先生、よい級友に恵まれた故であり、これも幸運と云うべきであらう。

中・高の六年間については皆様ご存知なので、後一つだけ挙げれば、書道部の創設から解散までの経験を得た幸運である。小六担当の栗山先生から、比田井天来の流れを汲む、上田桑鳩会長、森田子龍主幹の『研精会』を紹介され、入会したのは土佐中入学後である。ほどなく、大嶋校長の支援を得、漢文の吉本先生に顧問をお願いして書道部を創設した。記録がないが一年の終りか二年の初めに違いない。この書道部では集まって書くことはせず、部員は機関誌『書之美』の競書に規定に従って出品し、出来が非常に好ければ氏名の上に賞の字がついて、作品の写真と担当の著名書家の評が掲載される、出来がかなり好ければ氏名の上にも○がついて昇級する、出来が悪くても氏名は載せられるという通信教育に参加するだけである。『書之美』は部数に応じて割引があり、それを利用して勧誘に努めたところ、部員は急速に拡大して七十名を超え、運動部、文化部を通じて人数としては最大の部となった。もちろん同級生が中心だが、二年生、一年生も少なくなかった。部員が増えたということは雑用が増えたということである。高校に上がって進学が視野に入ると、雑用が勉強の妨げになるという感じが出て来て後継者を探したが見つからず、秋の高知大学書道展で金賞三名、入選九名の結果を出したのを置き土産に、書道部を解散した。

この経験を幸運と考えるのは、『研精会』でも大きな支部の長として中学生の身で役員欄に理事として栗山雲涛先生と名前が並ぶようになったからではない。後年顧みれば、プロジェクトを企画し、関係者を説得し、『雑用』をこなす経験が私の財産となったからである。会費を集め、機関誌を一括購入して配布し、出品作を集めて郵送する等々の雑用も、学年を跨いで部員が増えたと一仕事である。さらに、中・高合同の予算会議で上級生と予算の分捕り合戦をしたり、紙、筆などの一括購入で部員の便宜を図ると同時に僅かの利鞘で活動資金を捻出し、『研精会』の本部から主幹で後に芸術院会員になる森田子龍に来て貰って研修会を開いたり、高知大学書道展という他流試合を実現させたりというような経験は、その後、大学や実社会で物事を進めるのに大いに役に立ったからである。

大学から通産省卒業まで

大学入試の当日受験票を忘れ、慌てて取りに帰ったが開始時間に間に合い事なきを得たのは幸運であった。通ったのは幸運ではなく当然だと今は思うが、滑り止めを全く受けず布団を東京に送ってはいしたが、通知が来るまではやはり心配して、毎日ピンポンをしていた。

一年の秋の駒場祭では竹島（独島）問題をテーマにページェントを出した。最近の同窓会で、「君が企画、演出、主演をした」と言われて、古いアルバムを見たら中央で大手を広げている写真があった。

大学の後期課程で教養学科のイギリス分科に入れたのは幸運であった。アメリカ分科などで勉強のし過ぎで身体を壊す学生が続出し、その対策として設けられた正科のテニスとゴルフに精を出し、生涯でもっとも重要な精神と身体の健康の確保の術を得たのは大きい。教授達も入った大旅行、同級生有志だけの小旅行、ブリッジ等々は楽しかった。勉強の方は、小人数で先生を囲み自由に話す時間は楽しかったが、中身の方は後に『無用の用』と説明することが多かった。それでも、就職の面接は教養学科の説明だけしていればよかったのも幸運の一つかもしれない。この濃密な時間を共有した仲間には生涯の友となった。

官庁に入るなど全く考えても居なかったのに、母が受験料を出してやるというので公務員試験を受けることになった。このことは幸運、成績は実力という言い過ぎかもしれないが、行政職の試験は常識で対応できた。論文は道徳教育論を書いたが、木村健康教授に相談したら、文部省はやめて通産省に道を開いて貰いたいと言われた。これはたいへんな幸運であった。文部省なら絶対勤まらなかったというのが妻と私の一致した意見である。通産省の採用責任者の秘書課長は、

後に三木大臣の時の次官で『佐橋大臣、三木次官』と書かれた大物で、珍しがられて採用されたのだろう、これは実力より運で、教養学科第一号となった。

役人は先例を重んじる。変えるとそれを決めた先輩に異を唱えることになることに気付かなかった私は、最初の仕事の通商白書でそれまでの統計を変えた。貿易統計には金額と数量の欄がある。石炭、小麦粉、鮭缶詰には意味がある。鉄道レールならまだ許せる。しかし、カメラやミシンにキログラムが単位の数字を入れて何の意味があるか、昭和三十二年以降このような数量の欄は空白になっている。これは判りやすい一例に過ぎない。でも、土佐犬と呼ばれはしたが、仕事がり難くされたことはない。合理的で懐の広い通産省ならであった。

同じ課に山内家当主豊秋氏が囑託で見えていたがたいへん親切な人で、て、運転免許を取れと進めて下さった。ペーパードライバーは詰まらんとお断りしたら、自分の車を運転させて上げるからと勧められ、取ることにした。これはたいへんな幸運であった。早速教習所に行き、最少の二十六教程・十三時間で一発で合格した。練習はトラックで試験はセダン、練習でどうしても出来なかったことがすっと出来たのは幸運か、シンクロナイズドギアのせいか？ その後山内さんは、私に運転させて助手席に座り私の家まで来て下さり、私が降りるとハンドルの取ってUターンして帰られる、私はそれを拝んでいた。車は古いオペルだっ

た。その車で日光へ行つた。ハンドルは私、途中小雨が降り始めたばかりで、急加速した覚えもないのにスリップした気がしてブレーキを掛けたら、車が静かに滑り始め前後が逆になり、さらに廻つて二百二十度くらいのとこで道路から飛び出した。その時対向車が無く、道端の人家は途切れていて、種蒔きのためふかふかに耕した畠に落ちたので損害は軽微に止まった。少し後の話だが、新婚旅行は車で行き未舗装の日光裏街道を通つて『塔のへつり』を見、磐梯スカイラインを楽しんだ後、松島で車の後輪が突然車軸ごと抜けてすべてのブレーキが利かなくなつた。上り坂だったのでお尻から山に突っ込んで事なきを得たが、スカイラインの下りと同じことが起きたら、新婚で天国へ直行していたところである。その後、永年走っているがこのような故障はない。時に二百キロ出していたパリでも、渋滞で眠くなる日本でも無事故である。事故は自分が起こさなくても起きる。無事故は幸運のお陰である。先月の欧州でのドライブは二十年余年ぶりで、しかも右側通行なので少々心配していたが、無事に千五百キロ近く走れた。少し、しんどかつたけれど。

入省二年目に課長がフルブライト留学の受験を勧めて呉れた。尻込みしていると、「『下手の鉄砲数打ちや当る』は正しくなくても、『打たない鉄砲は当らない』は絶対に正しい」と尻押しして呉れた。これは幸運。合格したのも幸運。フ

ルブライトにもいろいろあるが全額米政府負担は芸術分野も含め年に三十二名、しかも、分野、出身大学、現住地ごとに割当があり、経済、東大、東京が一番難しかったが、何故か通った。英語力で通ったのでないことは間違いない。この英語力では米国へ行って困るだろうと合格者三十二名中、私と後一名だけがとくに指名されて月謝米国政府持ちで日米会話学院に行かされたからである。仕事柄、論文というほどではないが時々駄文を書いていて、官庁エコノミストの末席に名前が出ていたのが役に立ったのかも知れない。

ケネディ暗殺の後『古き良きアメリカ』は消えて行くが、その前に行けたのは幸運だった。善意に満ちた人達に迎えられ、泊めて貰った。田舎では、数十人が見に来まるというパンダ並みの扱いを受けたこともある。車を買えずに友人の車やレンタカーで一萬六千キロ走った他、グレイハウンド、汽車、稀に飛行機も使って、帰るまでに四十四州に足を踏み入れたが、不愉快な記憶は思い出そうとしても出てこない。

帰国すると丁度日本経済が国際化する時代に入っていて、新設された国際経済室に入れられた、室が課になり部が出来るまで居て、雑用をこなした。その一つに『一目で見る日本』とでも訳すべき英文小冊子を、経団連に頼まれて作ったことがある。役所では集中できないだろうと、帝国ホテルのスイートルームに缶詰

めにされて後輩と二人だけで一気に書き上げ、経団連会長を団長とするミツションが持つて行くの間に合わせた。この冊子はその後、ミツションが出る度に利用され、仏、独、西、伊語版が作成された。こんなことで通商畑に七年居たが、一年以上米国で遊ばせて貰ったので文句は言えない。借りは返した。

その後は、化学産業、火薬、高圧ガス、金融、原子力、エネルギー政策、貿易交渉、産業立地、石油、貿易・投資保険、輸出信用交渉、コンピュータなど情報産業政策、総合産業政策の国際論議などを、東京とパリとで経験した。日本の経済力や国際的地位は急速に向上していた。族議員が強くなって来てはいたが、少なくとも通産行政においては官僚が主導し、もちろん実業は民間企業が行っているが、課長のレベルでもテクノクラートとして、経団連の会長以下幹部に直接説明するのが当然の時代であった。事の大小はあったが、自分が国益に貢献しているという実感が持てる仕事を続けられたのは、幸運の極みだった。

退官後現在まで

官僚の給与がまだ安く社会的地位が高かった時代が終わる前の八十四年に退官した。最初の仕事は情報サービス産業協会の初代専務理事。大企業や大メーカーの子会社の天下り社長と、ゼロから起業し急成長中の中小企業の社長連とは、全く

違う人種であった。典型的なのは交際費と政治献金の額や出し方だった。後者はなんとかまとめて協会に統一したが、よく言うことを聞いてくれたと今になって思う。会員名簿を作り、事務局の体制を固め、協会のロゴを協会で作製し、情報サービス産業白書を作るなど、立上げの忙しさと面白さを味わった。米国の同種団体と姉妹団体協約をまとめ、余勢を駆って韓国とも姉妹団体協約を締結した。先方は現代財閥の総帥の鄭会長がサインをした。爾来三十年、情報サービス産業協会は会員企業五百余社、その年商が九兆円に近づく大団体となったが、それを軌道に乗せたと言えるのは幸いである。

二年ほどでSRIインターナショナルに移る。スタンフォード大学の附置研究所が独立・改称した米国第二の研究集団で、もろもろの知的サービスを売っていた。日本の国際化を支援し、そのお礼に贈られた寄付で建てた『経団連ルーム』が加州の本社にある。今度は天下りでなく、年俸相当額の費用をヘッドハンティング会社に払って二十余名の候補を探し、絞り込まれた二名を加州の本社で幹部総出で面接する米国的選考だったが、これに通ったのは幸運であった。年二千五百万円の三年契約で、オフィスは帝国ホテルのタワーにあった。SRIは公認の非営利団体だが、サービスを売って自活する必要がある、巨大銀行のシステム作

りやスリーマイル島の事故調査など、多種多様なサービスを売っていた。パソコンのマウスもその発明品の一つである。

面接時の話では、日米の懸け橋役とか好いことづくめだったが、実際には傾いた日本事業の立て直しのためのスカウトだった。電子政策課長の昔、SARIの調査を使ったことがあったが、私は通産省からは仕事は貰わなかった。朝七時に無人の事務所に入り、初年度は幸運にも日本事務所として売上倍増、利益五割増の実績を積んだが、趣味に合わない『商売』は一年限りとし、二年目は国際会議などをしていった。最終年は、通産政策の本を英文で書くつもりで、報酬を五分の三として週に三日働くことを提案して認めてもらった。『つもり』を一時は口にも出していたので、聞きつけたプレンティス・ホール社の編集者に口説かれたこともあったが、結局ゴルフの腕を上げるのに時間を使った。その時は怠惰に流れたことに若干の悔みがあったが、今から振り返ると『正解』だった。最後の仕事は、財界五輪と言われ四年に一度世界中から企業のトップが桑港に集まる世界産業会議に代表を送ることであった。初期には経団連会長以下財界トップが揃って出ていたが、討議に付いて行けず四年前には僅か六名と淋しい限りであった。SRI本社はこの会議の共同事務局を務めており、私個人としても何とかしたいと思っていたので、旧知の大来佐武郎氏、権名武雄氏の他、まだ数少なかった英語

の使える財界人に参加をお願いして廻った。最終的には小林陽太郎氏、茂木友三郎氏等二十名の参加を得て、そのうち七名がスピーカーを引き受けて下さった。ホンダの入交副社長にお願ひしたら、奥様が土佐高出身とかで、誰か出すと即決、ホンダアメリカの吉野社長が話して呉れ好評だった。

三つめは、通産省が日本の経営を世界に広めようという、今顧みるとややのぼせた発想で国際ビジネススクールを創る仕事であった。APEC大臣会議まで提案していたが、幸運にも、既存の大学等をネットワークして行うAPEC人材養成事業に軌道修正がなされる。APEC創設の翌年、まだAPECが事務局を持たない頃、毎月二十万円のファックス代を使う『雑事一切』を担いでこの事業を立上げ、初代議長となり、四年後後継者を得て名誉議長となった。この人材養成事業ではいろいろな国際プロジェクトを立ち上げ、会議と合わせて毎年七回出張するのが十年続いた。

少し脱線するが、APEC設立三年後に事務局が出来、その情報通信システムを作る専門家会議が開かれた。その場にユーマーを代表して押しかけ、専用回線至上主義の国際通信会社の専門家と闘って、APECのシステムの端っこにインターネットを組み込ませた。その後二十年、この話が嘘のように聞こえる時代となった。

脱線もう一つ。日本航空のグローバル会員になって四十年近くになるが、累積搭乗記録が百八回、距離で三十三万マイル、月までの往復の七割という通知が来た。日航を使ったのは出張の半分くらいなので、通算の飛行距離はその倍くらいになるが、一度も怖い目に会ったことがない。これも幸運というほかない。

* A P E C 人材養成事業の十年は当時私のライフワークと思ったほど面白いことが多かったが、長くなるので、最後の国際商事仲裁協会理事長の三年と併せて省略する。いずれも、幸運に恵まれ楽しかった。*

家族と友人

父母については土佐中入学まで書いたが、その後を極端に端折って書く。父は私の大学一年の時上京し、超零細企業の司に入り、同店が赤坂に移り岸信作や佐藤栄作も来るような土佐料理店になり、さらに女将の死後廃業に至る少し前まで、ずっと経理を勤めていた。私が結婚する半年前に家を鳩ヶ谷に建て、一緒に住んでいた大原町の借家を私に残して呉れた。母は私の娘二人をパリ勤務の六年間を除いて、ずっと育てて呉れた。退官の年、今の団地に十五倍の競争に当り、販売事務所へ行ったら権利落ちの二戸が無競争・同額で買えるというので即決し、父

母は同じ団地の庭付きの一戸に住むことになった。ちなみにもう一戸の大きい方には森下巖君が入り、後年ご両親も移り住まれて私の隣人となった。

父は脳梗塞で植物人間になって一年半、二十三年前に八十三歳で逝った。介護、看護の一切は母が独りでした。父の死後しばらくして母はたいへん元気になった。私は申し訳なく思い孝行しようとしたが、母の楽しみは帰高するくらいしかなかった。羽田まで連れて行って乗せた。当時は八十を超えた老人が独りで乗るのは珍しかったようで、全日空には大事にして貰った。三年前百三歳で永眠したが、その前一年余りはほとんど眠っていたので永眠との区切りは判らなかった。父の逝去の際も同様で、母がほとんど悲しまなかったように、母の死も私を含めて家族に大きな悲しみをもたらすものではなかった。他の肉親とも死別する悲しみを実感したことはない。外地など故郷と遠く離れていたためである。

結婚を前提としない『交際』はすべきでないとは何故か子供の時から思っていた。いわゆる見合い結婚はロマンがないし、官房秘書課に山積している候補は問題外、他方、三十歳までには結婚したいが忙しくてどうにもならないという二十代の後半、教授宅に大勢集まる新年会でたまたま今の妻に会った。忙しくてデートの時間が取れなかったが、同じ霞が関なので昼飯は食えた。結納を小切手で送って婚約。先方がユネスコ本部の研修生でパリに一年行ったので遅れたが、三十

歳になる前に結婚。その前に地獄の通商局から出ていて新婚旅行の時間も取れた。来年で五十年になる。二度のパリ勤務も、別居は赴任時と帰任時にそれぞれ約百日に止まる。二人共それぞれ好きな仕事が続けられ、十分面倒を見なかつた娘達は独立心旺盛だが、私の母に曾孫を見せる孝行をした。

母に言わせれば、すべて荒倉様のお陰である。荒倉神社はトンネルが出来た今、旧道の傍に静かに建っている。

完